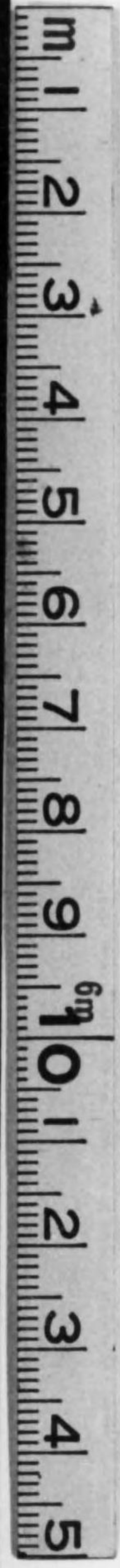


914.6-042-2ㄅ



1200500758132

914.6
12



始



914.6
0.42
2



岡本かの子著

生

論

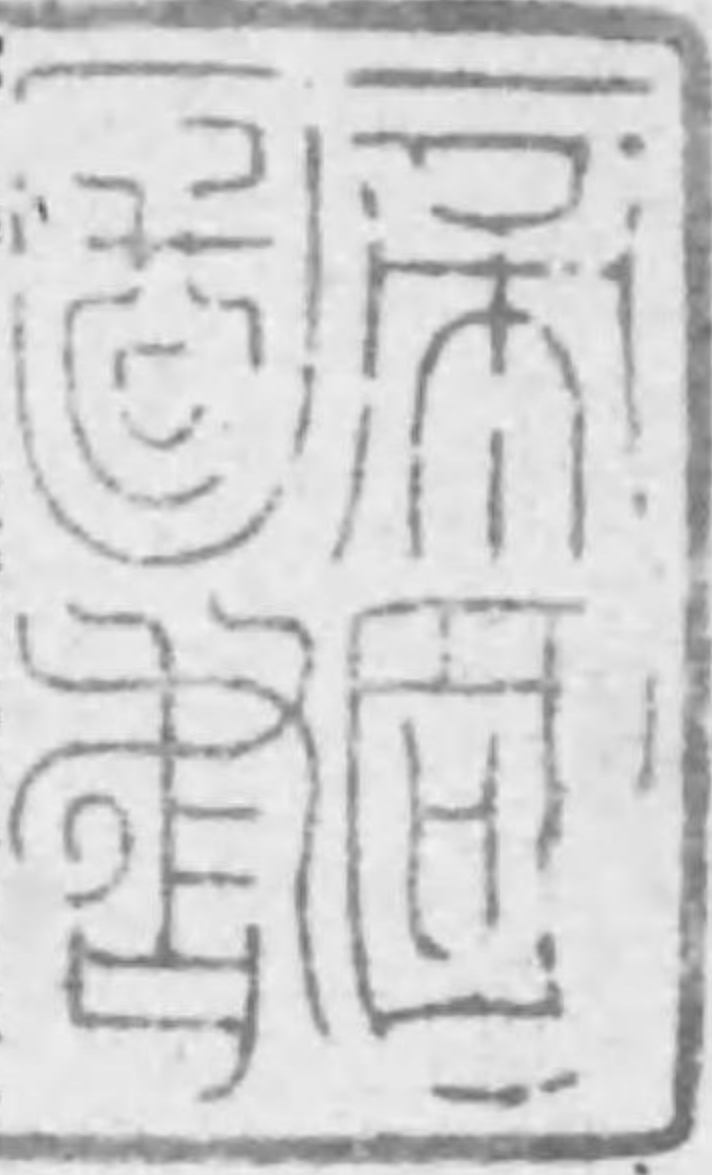
建設社出版部



7410
100

1-3
16-9

人生論



幼時 私達は此の世に生れて、動物的な、自然發生的な、幾年間かを過す。稚純な本能慾と、反射神経のほかに何物もない。それはまだ、完全に人間とは言ひ切れない。此の時私達は、何も考へない。否考へるが、考へた時がすでに表象である。その間に、時間的にも空間的にも、距離といふものがない。此の場合考へるといふよりも、心的現象としては、衝動と呼ぶべきであらう。衝動が直ちに心象上の波紋を生み、それも忽ち掃き消す如くに消えて行く。昔から、無念とか無想とかいふことを、孩兒こどもの上に持つて行き、なぞらへるのは當

を得てゐる。私達が孩兒の時に覺えた生に對する感慨は、どれも一々翼を持つてゐて、其の場其の場に飛び去り、追憶の手を翳してみても、永遠に還らない。搖籃の中の年頃では、のかに戀を覺えたと追想する西洋の文學者もあるが、それはもうただの孩兒ではない。孩兒の中に既に少年期が潜入してゐるのであつた。

幸福と不

考へるといふことは、精神と物質との間に、時間的か空間的かに、距離が出来るところから生れる。だが難する人は、我々の心には形と何の關係も無い幾多の心的現象が、起滅すると言ふ。例へば、あてども知らぬ憂愁の如きもの、と言ふかも知れない。けれどもそれは、矢張突き詰めて行けば、結局、物と關係がある。それに對して探求と分析の精神的勞力を怠らないで、其の憂愁の元か末かを手操り寄せて見るとする。元に肉體の生理的違和が在るのでなければ、末に行き届き兼ねる何物かが潜んで居るのを發見するであらう。今もし假りに、立ちどころに何れかの缺陷を補へたとしたら、其の憂愁はどうなるであらう。それでも尙憂愁は、雨期の雨雲の如くに立籠もるであらうか。水蒸氣なき處、雨雲の

凝集する道理は無い。ここに於て私達に、精神上に物質の全充足があれば、或は物質上に精神の全的合致があれば、最早や考へるといふことは無くなる。即ち幸福への安定である。人間が絶対に幸福である時、最早や人間は考へない。考へるといふことは、人間に缺陷があり、矛盾があるところから来る。ダンテの神曲も天國篇へ行けば、其處に考へてゐるらしい姿の生きものは一人も發見されなくなる。唄ひつ、舞ひつ、してゐるだけである。ロダンの傑作「考へる人」は下界の不滿を表現の對象としてゐることに於て、傑作なのである。天上界の消息を穿つ姿としたなら全然意味をなさない。

すなはち、考へるといふことは深淺の度はあれ、兎に角不滿の道程にあるものの心的状態であることを知る。また、不滿は精神と物質との時間的、或は空間的の距離感より出發してゐることを知る。

物心一如

佛教哲學に於て、物心一如の境界は、人間究極の理解體驗であつて、人一度そこに到る時は、世上のあらゆる矛盾を解き去り、全宇宙を抱融し、理として通ぜざるはなく、物として領^レかせざるなき圓滿無上所の到達を示してゐる。ここに於て、ここに到れる人を、最

超人格 早や佛教哲學に於ては、人間とは呼ばない。超人格の名を與へて佛陀と稱してゐる。

六

だが、實際問題として私達人間は、智、情、意の三つの力を全動員し、努力策勵して、果してさういふ状態にまで達し得られるものであらうか。人間の不満、不安から脱し得られるものだらうか。私達は徒らに夢に陶醉してはならない。把握は現實の此の掌に於てでなければならぬ。私達は、一方主觀的直觀の照尺を正しくし、他方また能ふ限り、客觀的實證の力を運び來つて、内外相應じ、検討を承肯し得る程度まで鑿り進めて行かねばならない。

物質及び
精神の展
開性

實を言へば、元來、物質も精神も、共に智識界に向つて無限の展開を持つてゐるものである。例へば物質に於ける極微を探るにしても、それは八十幾種の分子となり、分子はまた九十幾種の原子となり、原子は電子粒の活動といふことになつてゐる。廣い宇宙を埋めてゐるものは、電子一元の活動と認めてしまへば、それまでではあるが、然し此の電

子の質量、相貌、機能等、私達に現在知られてゐるものは事實の何億分の一であるか、極めて寥少に過ぎない。過去の科學の智識に比較すれば今日の科學は殆んど奇蹟のやうな發達の仕方である。私達の短かい半生に於てすら、ニュートンの地球引力説は、アインスタインの空間の歪の引力説と覆へつた。其の過去から今日までの發達の状態より推して將來の發達を察するに、恐らくそれは驚異に値するものであらう。然し、それさへなほ物質の祕密を解き明かし、完全にその把鼻を捉へるといふ確信が持てる時期を想像してみるのは、漠として霧中に走り入るの感がある。宇宙に於ける物質の存在は必ずしも電子その儘の姿で私達に交渉してゐるわけではない。變じて光ともなり熱ともなりして私達に觸れてゐる。否、そのみならず、より多く特質を形作つた化合の姿となつて、水、空氣、石炭を始め、あらゆる物質となつて私達に觸れて來る。物質界の此の一々を實の如く本質、相貌、作用に於て、われわれが知識し得るのはいつのことであらうか。恐らく私達の智識が進めば進むほど物質の視野も亦、次ぎ次ぎに謎を展開して來、丁度、歩む人に對する地平線の關係に等しいものではなからうか。

七

精神界に於ける黎明の進度も同じことである。催眠術が発達し、精神分析學が創始され、今まで私達が些の想像だになし得なかつた無意識界の消息が、ほのかに私達の注意に觸れて來た。精神界に於けるアメリカ大陸の發見である。そして、その陸は、嘗てわれわれが胸中の全世界とのみ思つて居た意識界を全部合せたものよりも、なほ、面積は大きいと言ふではないか。私達の經驗するところのものは、塵の毛程で突いたものさへ、必ず私達の無意識の境地に記録を遺し、生涯いつでもその記憶を蘇らすことが出来る筈なのだ。それが、なかなか端的にさう出来ないのは、却つて意識の膜が其の上層を張つてゐるからだ。人は必死の場合、意識の膜を掻き除ける時に、思はず無意識の偉大な働きを露顯するものである。火災の刹那に常力では耐ふべからざる重量をやすやす擔ひ能ふが如き、醉へる人の轉落するに意外に負傷せざるが如き、右の實例の平易なるものとしてよく示されるところのものである。今日、研究されてゐる程度の無意識界の學理すら精神分析醫家は既に治療に應用し、着々と其の効を擧げて居る。佛蘭西現代小説家のジョセフ・ケッセル氏に「晝顔」の作があるが、其の作では、小兒時代の無意識界への印刻が、如何に成長した

後にも自覺の症狀無くして行爲の上に大きな影響を與へるものであるかを凄慘な興趣で叙してゐる。即ち、此の智識は文藝にも採用され、心理描寫の上に新生面が拓かれんとしつゝあることが判る。

とは言へ、今日の智識より將來の智識を望見すれば茫として無窮の謎は視野に溢れる。そして物質も無限ならば、精神も亦無限である。此の中間に介在して、有限の壽命と有限の能力しか持たない人間が、容易に兩者の一致を心身上に持來らし得る道理がない。兩者の間の時間的、空間的距離は、ひしひしと私達の身に感じ、心に迫り常に焦慮を絶たしめない。絶對の幸福はいつ來るであらうか、私達に考へることも無くなり、調和と渾融に陶然たり得るのは、いつであらうか。思つて茲に至れば、史上、幾多の懷疑論者、厭世論者が出たのは無理もない。此の點より顧みれば、彼の唯物論者の説く經濟學的ユートピアも、唯心論者の説く精神王國も事實の世界からは、遠い夢物語であつて、現實逃避の自己満足論とも言ふべきである。何故ならば、今日握り得た一毛の智識によつて將來迎ふべき事實の九牛を律せんとするからである。

人生の秘
密

然しながら、更に翻つて考へるとき、われわれは一方、多幸の感慨が無いとは斷言し兼ねるのに氣附かないだらうか。未知を、知に變へて行く希望に燃えないだらうか。謎の原野に確信を創造して行く勇氣に慄へないだらうか。成程われわれの人生に不幸と苦痛は必ず附随する。然しながらそれ等を突詰めて凝視するとき、それ等にまた附随する或る意義を發見し得ないだらうか。不幸と苦痛そのものに、驚くべき人生の秘密の内在するのを嗅覺し得ないだらうか。

絶對的の幸福ならば知らず、相對的の幸福なるものは、其の因子のエネルギーが消散するとき、再び不幸に陥るのは理の當然である。相對的の悦樂も亦同じ理由の下に、其の把持に永遠性を缺いて居る。故にわれわれは此の種の満足に餘り多く期待し能はない。寧ろ不幸と苦痛の上に逐上性を認めるのである。不幸、或ひは苦痛の性として、必ずその境地より逸脱せんことを懐ひ、逸脱せんとする爲には、努力と研究と、修熟は、止むべからざる足掻きである。あらゆる人生の開拓と豊富は皆この足掻きより産出するものと言ひ得べきであらう。

これに引きかへ、相對的の幸福の果無きことは、前にざつと述べた。それは果無きのみ止まらず、人間の性質として所謂幸福に居る時、やゝもすればそれに恒久性あるものと思倣し、私達の現實に對する認識を誤るのみならず、認識せんとする努力さへ怠り勝ちになる。私達が現實に對して智識の過誤を生ずる時、私達は眞の意味での生活の適應性を失ふ。そこに再び不幸は來る。即ち相對的の幸福の境地こそ最も危機を藏して居ることを知る。

不幸は強ひて求むべきではない。然し、不幸には比較的弾力性がある。幸福の持つてゐるものは弛緩の誘惑だ。此の理を私達はよく知つて、不幸に居て氣を落さず、幸福に居て油斷なく、逐次運ぶべき歩幅を一步一步確實に、目的へ向つて踏み出すべきである。翻つて考へて見るのに、幸福と言ひ不幸と言ひ、要するに現實の上の約束では、比較的のものである。今の幸福も、過去或ひは未來のより良き幸福に較ぶれば、不幸に屬する。不幸とても亦同じく、より以上の不幸よりみるとときには現在の不幸も或ひは幸福の部分に入るべき

禍福の相
對性

かも知れない。東洋の諺に「禍福は糾^よへる繩の如し」と言つてゐる。そして普通此の諺を一方に幸福なるものあり、他方に不幸なるものあつて、其の兩者が、時間的、或ひは空間的に、私達を見舞ふやうに解釋してゐるが、解釋し易い爲や、或ひは實感上からは一應さういふ風にとるのも結構だが、深い眞實の理より言へば、其の一條の繩は禍でも無く福でも無い。無色透明の繩であつて、これを見る人の心ごころで、禍の繩目とも見え、また福の繩目とも見えるのである。今一つの繩目を禍と見れば、それより不幸なりし場合のものは、より禍であるべく、そのより福なりしものより見れば前の禍の繩目は福の繩目と見ざるを得ぬ。乃ち此の諺は、禍福の相對性比較性を表現したものと了解して始めて有機的な人生の運命を表現することに妙を得た諺となる。

禍福をあまりに定色的、二元的に解釋し過ぎて、それ等に對する私達の意力の變壓力を度外視してはならない。

茲まで書き來つて私は、これを讀まれた方々が、或ひは大いに不審がられる處がありはせぬかに思ひ到る。何故ならば、前には人生を無限と無限の間に挟まる有限にして刹那のいのち、空しき骨折りと言ひ、後には幸も不幸も共に恵まれた境遇で善處するものには、目的への好階梯、希望への跳躍臺だとも言つたりした。或ひはそれを矛盾と見、約變の速かなるものと誤解し、または思索の過誤を他に強ふると言ふ者もあらんかを惧れる。而して宇宙の謎、生の不可解に迷茫の極、自暴自棄的の勇氣を示唆するに非ずや、など思惟する者あるとせん乎、此の點の説明解案こそ即ち、本旨立言の骨子目的にして徐々論旨の展開を待つて、始終の關係を完了し得べきを期待するところなれど、當面の疑惑を排する爲には、尙要略のみにも速急に一言せざるべからざるを論旨進行上の當然の義務と信ずる。

無限と有
限

凡そ、有限に對する有限、或ひは無限に對する無限ほど含蓄薄く力に制約あるを感ずる。無限に對する有限にして始めて双者に無窮の生々躍動がある。

此の謂は餘りに哲學的詩的の表現で、理解に晦澁の伴ふのを免れないが、總て宇宙間の妙味といふものは、ほほこの公式の表すところに盡きる。例へば幾何學上にしても嘗ては

平行線を無窮に交はらざる二線として説明して来たが、それでは餘りに素朴な認識に終り枯木冷灰な實在論の捕虜となつて、何物たりとも深い意味での人間性と宇宙性とを擔はざるなき宇宙間の存在物の一としての線なるものの性質を了解して居ない。其の後發達した幾何學では、平行線も二線交る可能を認めて來て居る。無窮の末に於て交る二線の途中を切り取る場合にそれは平行線なのである。斯くの如く解して現實の認識を誤たず、線の性質を把握せりと做す。歴史哲學上に於て、一方の論者は歴史は永遠に繰返すものとして居る。また、一方の論者は、歴史は決して繰返さぬものとして居る。然しながら、今日、具眼者は双方の觀察點の相違を指摘して、歴史より普遍性を抽象すればこれに繰返しあるを認め、其の特殊性に着眼すれば、繰返さざるものと論斷してゐる。此の二個の原理の微妙なる共存を許すことに於て、始めて生ける歴史を私達の檢鏡下に持ち來すことが出来る。今少しくこの理を平易に言へば、此處に競走の速力に就いて百米の競走に於ける走者が、百米走り、百米にて止まることを豫定して走つたならば、決して快速力を出せるものではない。百米走る爲に、百二十米を走るべき勢を以つて走るとき、百米に於ける速力

は充實する。若しまた、此の走者に、百五十米もの伸びを豫想しながら、しかも其の勢を百米内に充實させるとき、百米内の速力は、其の壓縮の度に應じて向上する。もう一つ砲彈の衝擊力に就いて考へて見るならば、一つの砲彈が砲口から撃ち出されて飛ぶとき、一哩に達すべきものを百米にて遮りたる場合と、十哩に達すべきものを同じく百米のところにて遮りたる場合と何れが衝擊力が強からうか。一哩のものを百米にて遮りたるものより、十哩のものを百米にて遮りたるが、より多く強きはあへて彈道學の計算を俟たずして感知し能ふところのものである。

以上、これらの例によりても判るやうに、たとへ有限の事物でも、之れを其の有限の範圍内で收拾せんとするとき、兎角いぢけて不活潑になる。其の有限を、より少なき有限内のものとして收拾せんとして始めて活氣を増して來る。まして其の有限を無限の一部として收拾せんとする、その効果の大、ほほ知ることが出來よう。人生も亦その如く私達の一生は短かく儂い。然し、私達が私達の一生を生きるのに短かく儂いものを目標として、これに切嵌めようとしたなら、却つて其の短かく儂い一生をだも満足には充たし得ないであら

二生三生
を一生に

う。私達に二生、三生あるものとし、而かも其の力を一生に籠めるとき、短かく儂い一生は膨らんで来る。無窮を望んで其の光影を日々歩々に閃かすに於ては尙更其處に有意義の理を見出すであらう。

意力の弱きものに取つて、無限は絶望に等しい。だが、意力の強きものに取つては無限こそ私達に盡くるなき力の源泉である。無限の影を宿さない水、鳥、樹木は私達の眼を娛ませない。無限に縁なき現實生活には匂ひがない。而かも此のことは、私達の主観だけの好みでは無い。事實、宇宙間の存在としてアルファと、オメガとが附いて居ないのである。其の事實は有限の現象に、無限の實在性を帯びて居ることである。私は私達の生に就いて、逐次此のことを検討して行かう。

少年時
代より
青年時

私達がやや成長し、物心がつきはじめる時分になつて私達は私達の生をおほろに感じ初め、私達の生活が何物かに突き動かされるの覚え、目前がまだ定かならぬ目的に向つてし

代へ
本能とエ
ゴ

きりに喘ぎ求めつつある状態に氣付く。幼なき自覺と反省とが小さきところに芽生える。此の時、私達の精神と肉體とを占めて居るものは、最も單純素朴な姿の本能とエゴであることを後に至つて知るのである。

十九世紀末から二十世紀初頭へかけては、西歐北歐は物質文化の頂點に達した。人はもうこれ以上物質上で生活慾を充し得るかどうか疑はれるやうな時代であつた。唯物主義の科學は、此の情勢に拍車をかけた。此の時文學上に生れた運動が所謂自然主義であつた。自然主義文學の主張に就いては、一概には言へないが、大體に於て、人間性を解剖して其の根元に本能を突き止め、生活原理として個人主義を押し立てて行く方向線上に、主義の方向は在つた。

これはまた、少年時代の本能に潜在せしものを成人の中に認め、而かも、其の成熟と發育を愈々肯定せんとするものであつた。

事實は本能のうちにもいろいろある。默然そのままのものもあれば、超人的な崇高なものもある。

エゴイズム

エゴイズムとても同じく、我利一方の利己主義もあれば、愛他的な眞我主義もある。然し、此の時代の運動としては、特に其の中の低劣なものに目標を置き、其處に文學上の解剖慾を満足させた。

此の運動が斯うなるに就いては、止むを得ぬ動機もあつた。其の前の時代に行はれた文學思潮は所謂ロマンチック主義であつて、此の主義は自我の解放、自然還元の叫びを擧げながら、空想を尊び、感情を奔らせ、超現實的な美に耽る傾向が著しかった。いつれの運動も、其の前期に對し、反撥的に起つて來る以上、殊に其の對立的分子を掻き立てざるを得ぬ運命にあつた。彼の情熱的な非現實の精神を溺愛するに對抗して、これは冷酷なる現實曝露の戰術を執つた。其の極端に趨つたものが、人間本能の醜惡の抉摘であつた。

自然主義

勿論、自然主義作家の中にも、理想家肌の者もあつて、極端なる現實性解剖の結果、其處に見出したる矛盾を克服して、或は個人の解放と、社會の改造とに一縷の道を見出し、或は人道主義に曙光を望み、或は人間相互の愛の力に新時代のキリストの誕生を感じるなど、必ずしも一概に律することは出來得ないが、飽くまで楯の一面を固守したものは、近

本能とは何か

代社會の暗黒面に窒息し、人生の虚偽に絶望し、物質の力に魂を壓しつぶされ、現實の壁面の矛盾の汚點を見据えながら、苦悶と厭世に立竦まざるを得なかつた。モーパッサンの生涯、フロアベルの生涯、ヴェルレーヌの生涯等々である。これが爲に、彼等は世にも惨めな晩年を以て命を終つた。

だが、一體本能とは何物であらうか。其の本質の價値は如何なるものであらうか。本能慾の中で最も原始的で單純なのは食欲と睡眠慾とであらう。饑ゑては食ひ、疲れては眠るといふ状態は、動物に近いものである。

衣食住

普通、人間生活の様式を三つに分けて、衣、食、住と言ふが、食に較べて衣と住とは人間の欲望として、やゝ複雑なものである。何故ならば、人若し衣食住の三つを缺く場合、何を措いても之れを充たさうと圖るものは、必ずや食に違ひない。これを充たして後その次に、衣に及び、住に及ぼすに違ひない。此の欲求の順序は、或る點まで人生を律する。「衣食足つて禮節を知る」と言ふ東洋の諺は確かに人間の自然の一面を道破してゐる。此の意味から人はまづ自給自活の能力を養つて後、おもむろにより高きものの欲求に及ぶべ

しといふ近世幾多の實踐的處世哲學が出發して居る。

本能が原始的であればある程、人間必需の度を増して来る。だが、これを逆に検討してみるのは、本能は其の満足を與へられる時、實は無邪氣に消え去るのである。其の本能が、原始的であればある程、其の度を増す。私達は幾千の食を要求するものだらうか。私達は普通の健康状態にあつて一晝夜のうち幾時間か過分の眠りを食ほらんとするものであらうか。贅澤なものになつては、古代の希臘・羅馬、近代の支那の饗宴の如き、長夜連日に其の興を續け、胃囊その量に堪えざるに至れば強めて自ら吐き出し、胃囊を空にして再び飲食の勞作に就くといふ。また饗宴の間、按摩し、入浴し、歡樂を鼓舞するといふ。然し茲に至つてはもう普通食欲の使役するところではない。耽美派の藝術行爲である。食は饑餓を充す爲の手段では無くて、美慾の満足の具に供されてゐる。食物は肉體の健康を補給する爲に攝られず、美の感覺を刺戟する爲に單に肉體を通過するにとどまる。

自然のト
リック

一體自然は美巧なる方便を有してゐるもので、直接の必要を充さんが爲に間接な不必要を以つて誘ふことがある。花に於ける蜜のやうなものである。蜜は直ちに花を持つ其の植

物の種の繁殖の利益にはならない不必要物であるが、花粉を媒介する昆虫類を誘ふ爲には必要な用意である。食物に於ける味も之れとほほ同じ意味のもので、若し、食物に全然味覺の満足を覺えさす何物も籠められてゐなかつた場合には、動物は大概な饑餓に襲はれても、食物を口にすることを怠るであらう。此の點から、私達は自然に於ける本來の意志に伴ふ巧利なトリックを認めて悦んで其の妙味を味ふものであるが、然し、物には自ら限度といふものがある。本末を誤認してはならない。食の人間に於ける職能は、どこまでも饑餓を充し健康を補給するのが主であつて、其の美覺、甘覺は其の目的を滑らかに遂行する爲めの方便で、即ち従である。若し従を先にし、主を後にするものがあるならば本末顛倒の行爲である。自然に對し、本末顛倒を強ひて行へば、いつか自然の叱正を受け、罰則の約束に置かるるのは明かである。要するに本能の代表とも見るべき、最もその原始的な形に於ける睡眠食欲の如きは、人間の追ひ求むる目的物としては、有限のものであつて、如何に方法を施すとも、強ひてこれを理想化せんとするときには、直ちに矛盾が起つて来る。古代の希臘羅馬人は時代の人間として、其の時代の文化の極點に達し、理想を實生活

の上に行はうとして、所謂、美的生活を營んだ。そして食慾の上では斯ういふ無理なことをしてゐる。

一體美なるものは何だらう。美は恍惚である。恍惚とは何だらう。それには上質のものから下等のものまでであるが、要するに物心一如の世界に融けた感覺である。理想の實感的把握である。即ち彼の希臘羅馬人は理想の實感的把握を食慾の程度のものの上に行はうとして、斯くも其の矛盾を露呈せざるを得なかつた。これによりてみるも、本能は其の原始的な形のものほど消極的には強くして、積極的には弱きことを知り得る。

食慾、睡眠の如きはこれを妨げられるとき、異常な對抗力を以て反撃して來るけれども、之れを増長せしめ發達せしめんとするときには、或る限度の存するあつて、若し強ひてそれを越えんとするときには、必ず無理を生じて來るのである。これを以て觀るに、眠食の如き原始的本能慾は、人生上の意義として、消極的には兎に角、積極的には左程重大な意義を盛り能はない。自然主義文學の中で、此の本能慾より人間性を觀ようと企てたものもあるが、矢張り人間性の消極的に強き一面よりしか結局は掴み得なかつた。

美

住

これに較べると「住」の欲望は前の二慾より遙かに永遠性を持つてゐる。即ち多少積極的價値を持つてゐる。

普通人は衣食の資が足り、物質に餘裕が生じて來ると住居に就いて欲望を生じて來るのが例である。而かも、必要以上に其の好みを募らして來るのは、餘程物質的精神的に餘裕が出來てからである。

動物に於て「住」に對する趣味及び施設才能の發達せるものほど高等動物とする、と論じてゐる生物學の學者があるが、多少の例外を除いては、ほほ當つて居るやうである。

一つの時代が在つて、特殊な文化が其の時代に盛り誇つたとする。其の時代は後世の私達に向つて何を遺してゐるだらうか。學術、文藝は其の遺品の様式の一つであるが、もつと生活に即しつゝ通俗的に私達を其の時代に顧みさすものは建築である。私達が歐米旅行をして英國のオックスフォード市に入り、其處に空を摩して林立する枯骨に似たる家屋の塔尖を眺めるとき、執拗にして神魔相克せし中世紀時代のゴシック精神を今更生々しく眼底に烙印させられるのである。私達が京都に遊んで金閣銀閣の如き瀟灑な寺院式の別墅を

ゴシック
と室町時
代

訪ねるとき、私達は其處に華奢と閑寂が伶俐に調和された室町時代の風流に浸らせられるのである。時代の民衆にしろ、時代の英雄にしろ、彼等が其の時代の文化を發育せしめて、さて最後にそれを形に於て歴史上に誇示記念せんと企てるものは即ち建築である。彼等が其のことを意識すると、せざるに關係なく、彼等は時代の力を擧げて起塔造營する。既に此の場合に於ては、勿論、建築は生活の必需的要素を缺いて、人間の生命の保存慾、名譽慾、所有慾、美慾といふやうなものと結びつき頗る複雑な要求を現して来る。實際人間が一人、或ひは一家族、「住」に對して要求する必需的物量の限度は、知れたものである。數室の居間並に客間と厨房、仕事部屋があれば足りる。如何なる文明人でも、若し窮乏極致の境に置かれるれば、ヤツプ島の土人の家にも雨露は凌げるのである。困死はしない。其の同じ人間がヴェルサイユ宮殿を造り、ボツダム宮殿を造つてゐる。ヴェルサイユ宮殿に對するボツダム王宮は十八世紀佛蘭西文化に對する獨逸のウエルヘルム一世の國際的敵愾心より打建てられたもので、住居の上にも及ぼさざるを得ぬ根深い鬭争心の人類に存在する證據となる好適例であつて、競争は必ずしも國際的、或ひは時代的に惹起

■天樓

されるとは限らない。同じニューヨークの一都市内に在つて、僅か十年の間を距てて、米國は摩天樓建築の競争をしてゐる。即ち五十八階のウォールウオース・ビルヂングを打負かすべく七十一階のマンハツタン・ビルヂング、七十七階のクライスラー・ビルヂング、八十五階のエンバイヤ・ステート・ビルヂングが建てられた。斯くの如き發達した建築と對比して、人間の實質的に必要な住居の分量を考へるならば、私達は呆然か、失笑か、然らざれば驚愕の感に打たれざるを得ないであらう。

此の實用的見地から觀て、異常なる努力發達と思惟せらるる「住」の豪華は、何から來るのであらうか。其の心理的衝動の因子は、上來いささか説けるところの如く、人間の、より高級なる欲望と結び付いての上の表象である。

即ち、「住」の本能慾は、睡眠食慾よりも、生理的自然の制約から解放され、時間的にも、空間的にも、これを嗜むことに於て廣く永き領域を有するものであるけれども、而かも單なる住の本能慾には、さしたる發育や意義を期待し得ない。何故ならば、其の必需的要求には自ら限度があるからである。若しそれ以上發達せしむるには、上來説ける如き權

勢慾、生命保存慾の如き、より高級なる諸慾と結びつく必要があるからである。最早其の場合には純粹の住の本能の表現とは言へないのである。

しからば、住の代表的様式である建築に於て、それが人類の他の欲求と結び付いて最大限に成長するとき、如何なる意圖に纏つて隆起するだらうか。これを檢べることは、また此の本能と人間の理想との關係を知るのに便利のやうである。だが其の例を私はあまり多く持ち來すを要しない。たつた一つ、バベルの高塔の傳説をここに述べて足りると思ふ。

バベルの高塔

バベルの高塔は舊約聖書中に記されてある事蹟の一つであるが、人類が歴史中、建築に對して最も欲求を最高せしめた唯一のものであるであらう。即ち彼等は此の塔をして天に達せしめんと企てたのである。

また言ひけるは、いざ邑と塔とを建てて、其の塔の頂を天に至らしめん。斯くして我等、名を揚げて、全地の表面に散る事を免れん。——(舊約聖書埃及記二ノ四節)——
こと、もとより傳説に屬し、無稽の誹りは免れないけれども、此の無稽には人類と建築の關係に就いて何等か暗示したものが無いことはない。五十八階より八十五階に其の高さを

競ふ亞米利加の摩天樓は、今日のバベルの高塔かも知れない。能ふべくんば、天にも達せしめんとする高層慾が、いつの時代の人類の心の中にも、流れてゐる證據である。バベル時代以外の人間は、餘りに人工物の有限性を知れるが故に、夢にもかかる望みを建築にかけはしなかつた。けれども、若し可能性ありと認めた場合には、建築に對し、さうさう恬淡では居られなかつたに違ひない。若しそのことが可能ならば、人間の住居といふ住居は、その一々が或ひは悉く崩されぬバベルの高塔だつたに違ひはあるまい。

天

天とは何であらうか。無限である。——人間の意識の性質にもつと忠實に言ふならば——無限に近いものである。そして人間は、それに向つて達しようとする欲望を持つかも知れない。私は此處にも人間の無限に對する憧れを觀る。誠に草木の種子が地に蒔かれるや、其の芽は必らず天に向ふ如く人間に屬するあらゆるものは、其の仔細を檢討するときたとへそれが不可能とは判つてゐても、せめて方向だけでも、必ず無限への方向を執つてゐることを發見する。人類の欲望の芽のいちらしさよ

傳説に於けるバベルの towers は、神の意圖と反するの故を以て、建築を中止せしめられてしまつた。だが、私達に潜在する到天の欲望はどうだらうか。それは、崩れても崩れてもまた立騰る、あだかも夏日の雲の峰のやうに――。

戀愛

私は此處に戀愛を検討する段階となつた。戀愛は性を基底とし、普遍愛を屋蓋とする。フロイド精神分析學などに依ると、大概の人生上の事象は、秘められたる性慾の變貌として解説したけである。或は然らん。或は然らざらん。兎に角、崇高と思はるる或る感情にも、此の桃色の花瓣が散り混つてゐることを否み能はない。ある伊太利の尼僧々院の聖壇のキリストが極めて美男なるが如き、むかし流行した寺院の觀世音菩薩の像が、中性美を湛へ居るが如き、なほ此の筋道を露骨に現はしたものに、印度密教に於ける大聖歡喜天の信仰がある。又、佛教の或宗派の中にも、其の宗義を性慾に結びつけたものがあつた。これ等は、多く印度教より滲入せし痕跡を有し、古來、左道と稱して佛教の正統派より異端視せらるるところであるが、なほ宗教史上にまゝ散見するのである。邪宗淫祠と稱せら

るるものが、ともすれば愚民の間に渴仰を持ち、刈れども刈れども、其の跡を絶たざる、其の魅因は多くここに原因する。

成程、性慾と純粹愛情との、二つのもの間には全然關係は無いことはないかも知れない。然し、麴の臭ひの存してゐる酒は良酒ではない。性慾が、性慾らしき臭ひを滲入せしめてゐる戀愛感情は、良種の戀愛感情とは言はれない。まして性慾その儘の混淆を示して居る戀愛に於ては、酒に麴の混ざるを濁酒と言ふ如く、性慾其の儘の形を、中に存せしめる戀愛感情は、さしづめ、濁酒的戀愛とも言ふべきであらうか。

ドストイェフスキーは人間の醜惡面と人間の至上性と、同根同莖であり、或は壁一重すれすれであるところに着眼して、これを描破するに努めた作家であつて、特に其の晩年の大作「カラマゾフ兄弟」に於ては、溺没の性慾と無垢の聖愛との間に、一線道を導かんとする意圖がほの見える。惜しくも此の大作は未完にして筆者の死に遇ひ、筆者の意圖は充分形に現はれなかつたけれども、それでも此の兩極は、本質上にて邂逅の途にあり、而かも此の邂逅の勞を執るべく作者は異常な心力を費してゐることが窺へる。

「カラマゾフ兄弟」

現代英國作家のデイ・エッチ・ローレンスは、性慾の作家として歐米文壇にデヴユウした作家であるが、其の性慾を、嶄新なる現代感覺として、まみえしめ、またそれと自我と引組む底に人間の根強い意慾の發展——神に通ずる——を捉ふべく、其の深い意義を見出す爲には、全身的な理智化と、天稟の詩的直觀を働かしてゐる。

因習的な道德觀よりは、それも矢張り單なるエロチシズムに取れるかも知れないけれども、具眼者より觀れば、それは、最早や單なる性慾ではない。生命力にまで洗煉されてゐる。即ち、單なる性慾は飽くまで、單なる性慾である。逸すれば荒淫ともなり放肆ともなり勝ちなものである。これに意義を見出し生命化する爲には、藝術に於てさへ人格の異常な洗煉と陶冶を要する。いはんや實生活の上に、その價値を適用する時に於ては、單なる性慾と、其の鍛鍊されたものとは截然たる區別を現はす。

情慾は、或時は食慾より以上に深く本能を支配し、而かも生理的には伸幅の度廣く、且つ濃厚な感濁性を帯びてゐる。其の變態と潜伏の巧みなる、偷盜も三舍を避ける。之れに臨むに、戒心と慧敏とを以つてせざれば、往々にして正鵠を誤る。

最も素材にして而かも正統なる性慾論は、種の保存の目的に向つて立つ。自然は——或は造物主は——生物に其の種の繼續や繁殖を保たしめん爲に、性慾を附與した。性慾の意義はそれ以上でもなく、それ以下でもない。生物にして性慾の意義と價値を、此の位置及び度量に置くか、置かないかによつて、彼等が此の問題に就いての解決は、正邪を訣つて來ると言ふのである。之は生物學的に、妥當且つ穩健なる議論であつて、之を人類に當て嵌めても常識的の性慾道德論の根據となすのに足りる。

然しながら、今日の發達せる科學によつて、此の本能の動向や、變化を窺ふものには、右の素朴論よりもなほ深き生の祕密が、此の本能に盛られたるものなるを知りつつあるのである。醫學に於ける、内分泌や、ホルモンの研究、去勢學に於ける優良種の研究——等々は、私達にこの本能にも、人類の無限への向上性が結びつけられてゐるのを發見させるるのである。即ち此の本能は、尋常に働かしむるときは、種の繼續の策動となるが、然しました、これを他に轉向淨化せしむるも必ずしも其の勢力の喪失とはならない。いろいろの意味に於て其の効果を擧げ得るのである。内分泌やホルモンを適當なる生理的條件

によつて、自保せしむる時、人間の精神肉體を強靱ならしむる如き、生物に於ける性慾的なるものの機械的克服法によつて、其の質の向上飛躍を得るが如き——嘗て私達が宗教上或は藝術上の實跡に於てただ漠然と其の轉化融通を感じつつありしものが、今日科學に於て證明せられつつある。かの戒律嚴重なる禁慾生活者にして始めて神愛にも似たる普遍愛を氾濫せしめ得し聖者なるものの祕密を、また夫婦生活に恵まれざる天才が却つて彼の情緒を、遺憾なく製作上に吐露したる生理的經路を、私達はほほ合理の筋に就いて辿り得る。誠に枝を止めざれば花美ならず。本能に放縱にしてより高き本能を育つることは難し。私達は自然界到處に犠牲なるもの存するを認むると同時に犠牲なるものは決して犠牲に終らずして、そは單に有機的無機的の變貌に過ぎずとの見解の上に立つものである。そして此の見解よりしては性慾に就いても其の正しき意義に於ける範圍内にてはこれを認め、而かも同時に強き意力により此の本能の、より高級なるものへの變壓をも、併せて認めんとするものである。人生の目標は一つである。然しながら其の旅程は幾筋あつても差支へない。人々は其の趣味脚力の相違によつて選擇の自由を持つ。

禁慾生活

性慾と美

性慾を美慾のためにする一派がある。むかし印度に編まれた愛經カウステを始め、支那にも此の種の研究は多い。然し、食慾を美慾の爲にする彼の希臘羅馬の貪食者が生理的矛盾の爲嘔吐の如き不自然なる方法を取らざるを得ざりし如く、此の研究にも不自然なる條件が多い。要するに性慾も人間の體制に關係ある以上、人間の生理的制約下に支配せられ、強ひて此の埒を越えんとする時にはたちどころに矛盾を來し不自然に陥る。即ち性慾を生理上に於て美慾の追求に持來すことは不健全極りない。必ず其の返報を受くるものと覺悟しなくてはならない。若し性慾の健康なる美學的淨化を圖らんとするには精銳なる叡智と、純正なる感情と、強靱なる意志とによつて、これを肉體的實在より精神的抽象にまで蒸溜しなければならぬ。其の時それは人道、宗教上、藝術上等に於ける「愛の情操」とエツキスされる。このものは性慾より出づるにしても、最早や性慾ではない。焔は薪より出づるけれども最早や薪でないと同じことである。

愛の領域

「愛」の領域は廣い。生殖本能より放射する性慾愛もあれば、無限至高を抱かんとする宇宙愛もある。然し中心としては両性間に發動する「戀愛」を題材として検討して行くのが便利なやうである。

戀愛と性の問題

「戀愛」と言へば必ず性の相違を必要とする。世上には同性愛なるものの存在も見らるが、これは嚴密なる意味にては存在し能はざるものである。彼等は一應同性の姿に於て相牽引するといへども、仔細に検討する時には、内容として必ず一方は男性的であり、一方は女性的であることによつて愛を成立せしめてゐる。性の問題は頗る微妙複雑にして、男性にして女性的なるものあり、女性にして男性的なるものあり、或は中性的なるものあり、或は對者によつて男性的と化しまたは女性的と化する性質の人間も在る。生物學者が原始的生物の雌雄性を定むるに異常なる困難を持つ如く、發達せし人間に於ても其の感情上の性別を見究むるには相當、心理分析の批判力を費すのである。とまれ一たび、其の間に戀愛の牽引を見出す場合には必ず相互に相對性の區別が對立するわけである。

戀愛に性の相違を必要とする以上、此の感情の發露を以て直ちに生殖本能の前程となす

「人と超人」

見方がある。此の論者に従へば、戀愛は性慾の裝飾化となる。——バーナード・ショウの「人と超人」に依れば、戀愛は女性が優良種の男性を捉へて次の時代の人間「超人」を産まんが爲の誘惑だと解釋してゐる。——若し戀愛が單なる生理的欲求の企圖に添ふ感情とするならば、或はさもあらんかなれど、戀愛にはまた前後を截斷する獨立の戀愛感情の領域があつて、直接肉慾には連絡せず一種崇高なる犠牲觀念を喚び起し、中には却つて肉體的欲望より離却して其の神聖を保たんと努むるものさへある。所謂純眞と目される青少年期の戀愛には此の種のものが多い。これをしも全然性慾と結びつけて考へんとするは、あまりに粗糲暴戾の嫌ひがある。眞率なる若人が、他人より其の戀人の上に單に肉體的言辭を弄せられたるのみによつて、戀人の無垢を害せられたとなし、其の言辭を弄せし者に向つて決闘の擧に出でしローマンスはいくらもある。中世紀の騎士道の戀愛は絶対に肉體的交渉より超越せんとした。歴史上の事件として戀愛事件は少くない方だが、其の中で所謂プラトニック・ラヴも相當數多く數へられる。寧ろ戀愛の悲劇性、神祕性は此の種の戀愛に含まるる分量多く、それだけ、より多く後世の子女をして感銘同情を惜まざらしめ

てゐる。かの戀愛性慾論者はこれを戀愛の變態的なるものとして齒牙にかけざらんと努めてゐるやうだが、それだけでは説明し兼ねるところがあるやうである。例へばグメンチオの「死の勝利」の戀愛の如きを如何に解すべきか。此の小説の中に於ける戀人同志は、戀愛に於ては、あらゆる條件と屬性とを充足せしめ最早や此の現實の世に於ては求むるもの無き戀愛の極地に達したのである。故にかの戀愛性慾論者に従へば、目的とせしものを既に獲得したのであるから戀愛は其の責任を果し任務は解除せらるべきである。然るに「死の勝利」の戀人達は永く此の極地に止留せんことを懐ひ、而かも戀愛の性質として一所の止留に適せざる精神状態なることを願ひ、其の飽和状態を抱いて死の永續性、無限性に没入したのである。此の心理を仔細にみる時には、表よりは戀愛最高度の情熱を無限なるものに結びつけんと望みしものと考へられ、裏よりみれば人間本然の無限希求の本能が戀愛情熱の灼熱に遇ひ、其の發露の便りを得しものとも考へらる。若し此の心理だけの局處に向つて觀察すれば、此の心理の表裏は相即的のものであつて、兩面何れを優劣とも定め難き水融状態に眺めらる。然しながら人間構成の全部的傾向より此の局處の現れを打診

「死の勝利」

すれば、裏よりみたる後者の考察の、人間を解することに於て、より根本的なりと斷ずる理由を私は持つ。即ち人間は戀愛を通して無限への欲求の窓を開かんと試みるものであると言ふのである。何故ならば、上來說述せし僅か二三の人間屬性に關するものに於てすら、總ては人間無限性の發展の露顯をほの見せないものは無かつたからである。

人間が戀愛の情熱を死によつて不滅化せんとする此の意圖行動は、あまりに矯激であり且つ耽奇の様子にも見えるかも知れない。然し現實の戀愛上に於ても、たとへ其の行動が行はれずとも、また其の心理状態に永き持續を得ずとも、或は刹那に或は閃きに、これに似た熱情に觸れない戀人男女があるであらうか。若し毫末も其の微なしとするものあらば、それは未だ戀愛の三昧境に到り得ない二人である。情緒になほ餘滓を存してゐる戀である。眞にいとしみを遂げ得た戀人同志であるならば、そこは最早や現實に於ける最高頂である。更に登るべくば無窮の蒼穹よりしか持たない。其の時、死は氣球である。彼等はうつらうつら此の氣球を夢見る。戀と死とは昔から縁の深いものである。そして此の二つのものは、そのコンビネーションによつて互ひに彼等の魅力を増す。よし幾多の他の理由が

戀愛の三昧境

あるにせよ、情死の心理に此の無限欲求の系統が少からず織材として織り込まれてゐることとは疑ふ餘地も無い。

「死の勝利」は伊太利の文豪ダマンチオの大傑作と言はれてゐる。最近代に於て世界に最も廣く讀まれた作品の一つである。其の理由は他でもない。一般の戀愛の底に流るる秘奥の心理を明白に掘り出して形に纏めたからである。

此處に至つて考ふべきことは、人間の無限性の發展の爲に戀愛を死に結びつけて、果してよく其の目的を達し得るや否やである。戀愛至上主義者からはこれを達し得べしとせん。然しながら人間の機構に對して、より廣き視野を有する者は「必ずしも然らず」となるものである。死によつて無窮に没入せんとする手段は、非常の手段であり消極的のものである。且つ戀愛なる精神に於ける一局部の灼熱を通して人間の無限性を發展せしめんとする如きは、人間全部の完成を期する者よりしては、一詭道であり欺瞞であり早熟である。何故ならば、彼は戀愛の陶醉を以て他の理智的なものを全部眠らしめ、その際に乗じ

疑似の無限

て、疑似の無限——死——を正當の無限なるかの如くに思ひ做さうとする爲である。幸福は望むところである。然しながら酒に酔つての幸福は眞の幸福ではない。醒むれば忽ち雲散霧消する。むしろ欺かれたることの回想の爲に、醒めたる後は悔恨と情沈が加はる。いま假りに人間の死を最後絶對のものとするも、既に其處に欺瞞あり誤謬ありと知りつつ、強ひて不知を装ひ、其の闇坑に身を投げ入れるは遺憾の極みである。斯く知る以上は、戀愛も懇情も、命を冥ます麻痺酒に思ひ取られ一擲に擲排せらるべきではなからうか。まして死は必ずしも生の究極的終りでなく——その事は後になほ委しくサジエストス——生の一時の變貌としたなら、尙更この擧は私達の無限行進の軌道に障りの石を置くものである。直路にカーヴを波打たすものである。人若しその岸頭に臨むこともあらば、暫らく氣を落着け佇思三思すべきことが望ましい。

要するに戀愛は戀愛である。性慾の根に立幹するものでもなければ、無限の實を結ぶ準備の爲の花でもない。戀愛は戀愛自體に於て、根あり花あり斯くして其の一生を終る人間

心理上の
一年草

10

心理上の一年草である。斯く解することによつて正しく彼の價値を判定し得る。強ひて其の根を深く探るときは、本能の地下に於て同じく根を張る性慾の支根と纏れ易く、又その花の開花の眞最中には一種恍惚忘我の境を現じ、宇宙の無限性を捉へ得し如き疑似感覺を生ずる。しかも情緒それ自體は一年草なる約束に違はず、時來れば自づと生滅の理に恂ひ、色に盛衰の移りを示して來る。誰か戀愛を戀愛のみすみすしさの儘に永く二人の間に保たしめ得しぞ。佛文豪バルザックがハンスカ夫人に對する十六年間の戀は、その操持の堅守に就いて有名ではあるが、しかし彼をして操持せざるを得ざらしめし條件としては、夫人が永く人妻であり、彼への轉嫁を肯んぜざりし——ハンスカ夫人はバルザックの申出に對し、若し彼女の夫が死んだ後には結婚してもいいと答へてゐた——ことの爲や、彼が持ち前の運命に對する執拗なる反抗心等々があつて、嚴密なる心理檢討をこれに向つて行つてみるならば、彼の戀愛には意志的のもの、或は英雄的のものの混れる分子多く、幾許が純粹の戀愛なりしや、その算定には蓋し何人たりとも苦しむところであるであらう。いま若し假りにハンスカ夫人をして自由の身分の位置に就かしめ、バルザックをし

バルザックとハンスカ夫人

11

て彼の感情の熱烈奔放に任せて趣くところに趣かしめたとするなら、此の戀愛は幾許期間繼續が可能なりしぞ。思ふてここに至れば、其の結果は大體察するに難くはない。恐らく彼は戀愛の最高潮に達するや否や、直ちに結婚の運びに移つたか、さも無ければ忙はしく此の戀愛に於ての生滅を見送り、なほ飽き足らず他の第二第三の戀愛を経験せしやも知れず。一體因果律歴然たる此の現實世界に於て過去既に事存せしものに對し、「已」と言ふ言葉を押し冠せて、これに假論を擬する如きは當を誤るのみならず、事實に對して不遜の嫌ひあるを免れず。とは言へそれを承知の上にてなほ敢て私がこれを論ぜんと試みるものは次の終結に資せん爲である。即ち感情上の燃焼といふものはそれ自身の力のみでは永續すべき性質を持つてゐない。燃起に對する消滅は必ず従ひ來るものである。然るに此の燃焼に一種の勢力を加へる——それが順の勢力であらうと逆の勢力であらうと——時には其の加へらるる勢力の度に應じて燃焼は高まり續く。バルザックの場合では十六年間ハンスカ夫人に對する戀愛の不如意といふことが、彼の感情に加へられたる逆の勢力であり、將來に向つての結婚の希望といふことが加へられたる順の勢力であり、斯くして十六年間

の永きに亘り彼の感情の燃焼、即ち戀愛しつつある状態が續いたのである。斯かる場合、その戀愛感情なるものには意志が加へられ且つ理想化され、永續に便なる心理状態を執るのである。戀愛の偶像が出來上るのである。如何に精力的で潑刺たる心情の持主でも、實感のままとしての戀愛は、而かも最高度の燃焼をさうさう永くは持ち續けられないのである。感情なるものは、それほど渾み易く衰へ易いものである。それは貯藏法を施して僅かに保たせ得る。ここに於て考へれば、十六年間待つてハンカス夫人と結婚したバルザックには、既に心中理想化され偶像化された戀人ハンカス夫人を持つてゐた筈である。さうして、それを持ちながら現實のハンカス夫人と結婚したのである。結婚後此の二つの夫人をまのあたり比較せざるを得ぬ機會に迫られしバルザックの感慨はどうであつたか。

生き残れる戀人と死せる戀

感情の燃焼に對して加へられる順逆二つの勢力は、強大なるものほど、其の燃焼の焰を高く且つ永く擧げさす。故に戀愛に於ては其の執着が強くして而かも遂げ得られざるものほど匂ひも強く色も深い。それはよく生き残れる戀人の、死せる戀人に對する心操上に見受ける現象である。生き残れる戀人に取つて、死せる戀人ほど遠く距り而かも執着の深い

人

ものはあるまい。故に彼の心操上の戀愛は、まゝ宗教化され神祕の光を帯びて來る。其の戀愛は感情の臺上より一度理智の爐中に投入られ、日毎夜毎の深刻なる冥想の鑿を加へられ、殆ど生々しきものを除き去られ、戀愛の原理性に於てのみ再び感情上に運び上げられる。此の時對象物たる戀人は、時間空間を超越せる永遠の新しき肉體に脱ぎ替へさせられ、抽象の人格に於てのみ生き残れる戀人の胸に宿る。故に生き残れる戀人は歲月を経るままに老ゆれども胸中の戀人はいつも同じ若さである。十八にして死んだ戀人はいつまでも十八である。斯くて逝ける戀人と残れる戀人との關係は愈々偶像と信者との關係に淨濾せられ、兩者間の感情は宗教的のものとなる。死せし人を慕ひて墓守となりし戀人の歳經るに従ひ、一種の悟境を開くは、まゝある例である。

戀愛は運命の一つである

戀愛は運命の一つである。求めて其の經驗を得ず一生を終る人もあれば、逃げ走り、用心を重ねながら再三其の渦中に陥る人もある。何れを幸とも不幸とも定め難い。然しながら、若し運命の差配により其の術中に陥ることありとすれば、周章せず過重せず、價値を

價值として評價せんことを望む。また強ひてこれを退けんとすれば却つて自然の逆襲を受け縛縛を増す恐れがある。また強ひて惜しみ捉へて永く引止めんとすると、彼すでに生滅の性を帯ぶるものなれば、人爲のよく能ふところのものでもあり得無い。要は、これを人生に於ける嚴肅なる一箇の心的経過と思ひ、純眞にして而かも賢明に、敬虔なる奉仕的態度を以てこれを迎へ、これを送るこそ生命に忠實なる使徒である。

生活常識より、また感情經濟より打算すれば、戀愛を結婚への門出とするのが一番よいやうである。従つて次に此の問題の検討に當るべきであるが、尙此處に年齢の關係から青年時代に於て必ず襲來する人生上の問題として重大なものがある。それは職業である。論題に變化をつける必要上からも私は次に此の問題を取上げて見たいと思ふ。

職業
(原始的職業)

人間の生活の最も原始的形態は自ら漁り、自ら紡ぎして衣食住を充し、餘れる暇とエネルギーを用ひて藝術や娯樂の慰安を求めたものであらう。此の時代に在つては一箇の人間乃至一つの家族が一社會である。分業は僅かに男女老幼の別によつて保たれたに過ぎず、

男はどの男も共通に男性の勞務に屬する生活に必要な勞務を悉く行ひ、女も同じやうに女の勞務を行ふ。此の場合に在つては特に職業なるものはない。エキスパートなるものは、社會に分業行はれ、分業中より特にその一つを選んで専門にこれを擔ふ制度が出て來てから後のことである。若し此の時代に強ひて何が職業たりしやを尋ねるならば、生活が職業であつたと答ふるより仕方があるまい。或は逆に、職業は生活であつたとも言ひ得る。従つて此の時代に於ての人間は彼の勞務に對して、どれを好みどれを嫌ふといふ甲乙は附けなかつたらうと思ふ。否寧ろ附け得られなかつたと言ふ方が正當である。何故ならば、若し彼等が彼等の勞務に就いて一を愛し他を捨つるときには、忽ち其處に生活の缺陷を生ずるからである。彼は狩獵を愛して、造屋を怠るといふわけにはゆかなかつた。何れも彼の手によつてのみ營まれたからである。

生活即ち職業である此の状態を、人間の最も本然の生き方としてこれに還らんと努めた人々がある。十八世紀の佛蘭西に現れ、「自然に還れ」と絶叫したジャン・ジャック・ルソーの思想に共鳴した人々である。世にこれをルソーイスト、或はルソーイトと言ひ、宗

ルソーイ
スト

教、政治、教育上に此の應用を普かしまんと企てた。中にも極端なのは、原始人の生活その儘に自ら家を作り、自ら紡ぎ、自ら耕して、眞實の理に適へりとなし、詩情を満足せしめた詩人達もあつた。今、人類の歩みを一つの圓に譬へる。すると、加速度的に複雑なる文化へ文化へと進む運動は、圓の遠心作用である。而して此の力に反抗して元へ元へ引戻さんとする運動は圓の求心作用である。一定の圓に於ては此の二つの力は相殺され、靜止の圓周を保つ。然しながら、人類の歩みに於ては、何れか一方の力が時代の主導力となり、時を置いて交替する。圓に就いて言へば、遠心力優り、圓は膨大する時代もあれば、求心力優り、圓は縮小する時代もある。かくて人類の圓は、それ自ら彈動の力を帶び、無限より無限へ向けて永遠に轉回し行く。此の意味に於て、圓より球に譬へた方が感じを掴み易いかも知れない。即ち人類の圓球である。

また一つの時代に於ても、主流の力と反對の方向に働く反射作用は大抵ある。現代に於ける印度のガンヂーはそれである。彼に宗教上或は政治上の意味が多分に含まれてをるにしたところで、今日の機械時代に自織自製を實行して居るのはその證據である。

求心力と遠心力

分業

然しながら大局の上より觀れば人類の發達は、單より複に、粗より密に赴きつつあるのは否み難い事實である。原始時代に於てすら人が部落を作り、集團的の生活を行ふやうになつてはのおのおのその住民にて特質長所あるものを選び、これに適する特別なる職務を行はしめて、その任務の精巧優秀を期するやうになつた。分業行はれ、エキスパートの芽生えが出来て來た。

葡萄を作る村

私は外遊中、佛蘭西のロアール河流域地方に滞在して、これに關する興味ある現象を観た。葡萄畑に圍まれた農村なのであるが、全く農業ばかりの村で、それ以外の職業のものは一軒も交へてゐない。町へは川を越えて小一里はある。村の人は萬止むを得ない用事の外は部落の中で便する。それはどうするのといふと、此處に一人の娘が居る。他の娘達よりやや思ひ付きがあり、手先きが器用だ。それで刺繡の眞似や圖案などもやる。すると、村人はいつかそれに氣を止めて「彼女は美術の天才がある」と言ひ出す。誰言ふとなくである。遂にそれが輿論となつて總ての人に若しさういふ向きの仕事が出来ると彼女のところへ必ず持つて行く。彼女も得意になつて引受ける。また此處に一人の男がある。其の男

は他の男より排雲砲を射つことがうまい。此の地方は農産物の中にも取りわけ葡萄を作つて葡萄酒を製することを主なる生業としてゐるので、葡萄の實が熟する頃は、雨や特に雹を嫌ふ。大地に水分が溜れば、それを吸ひ上げて葡萄の房の中の果汁は味が薄くなるし、雹の害は言はずもがなである。雨雹を齎らす季節の雲は手を盡して打拂はねばならない。それに用ゆるのが排雲砲である。秋前のやや冷々とする夜、燈火を圍んで家族の人と牧羊に就いての素朴な話など聽いてゐると、遠方に遠雷とも花火とも聞き分け難い音がする。暫らく黙つて居た家族のものはその音を砲音と聽き定めるや俄に立上つて表へ出る。あとについて表に出てみると、今まで一點の曇りもなく晴れ渡つてゐた星空の彼方から脈はしい鈍色を帯びた雨雲の大陸がしづしづ空を呑みかけてゐる。千切れた先驅の雲が、まだらに近くの村の空まで最早や覗きに來てゐる。音はそれを射ち拂はうとする排雲砲の音であつた。初めは遠い地平線の森のある村の邊より聞えてゐたが、雲の大陸が此方へ蔓つて來るにつれ、近く近くと砲音が移り迫つて來る。驚くべき近さで、南の隣村の砲口の火蓋が切られた。その火勢と連絡あるものの如き速さで閃光は四邊の闇を裂き、此の村の排雲砲は

鳴つた。私は思はず耳に手を當てたのであつた。射上げた排雲弾は此の時、全村を惡魔のマントのやうに覆ひ冠せ、霧さへ立籠めてゐる濕つた空氣の中を驀地に飛騰し、墨空の中で炸裂するのであつた。然し雲の重圍は可なり深いらしく爆火の火影は銅色の花のやうにか見えなかつた。村の排雲砲は續いて幾發かを射ち試みた。が、雲は全くそれに關心を持たないかのやうに益々濃度を強めるばかりだつた。村の排雲砲は到頭射ち方を斷念した。急に陥ち込んだやうな静寂に村は包まれ、そして大粒の雨がポツンポツンと降り出した。愚かしいやうに近隣の村の砲音はまだ響いてゐる。

私達が、私達の寄寓してゐる家へ歸りついたとき、同じ道を後から同じ方向に歩いて來たらしい一人の老人が、家の前を横切り、なほ其の道を村の中へ歩いて行く姿が見えた。

排雲砲の
老人

私達の寄寓してゐた家の主婦は聲をかけた。だが其の老人は聳だつた。彼は黙つてとほとほ木靴を引きつづつて雨の中へ消えて行つた。主婦は説明した。あの年寄こそ排雲砲の砲手の天才なのだ。老人は十四歳から砲手を勤め七十を越す今日まで此の役を引受けてゐる。あの老人が射ち拂へぬやうな雨雲なら、それは運命的なものだ。他の誰が出て也不可能に

定まつてゐる自然現象なのだ。私はこれを聴いて微笑した。此處にもフランス人の天才製造癖が現はれてゐるから。そして又、さし當つて此の場合には、我々人類に於ける職業發生の経路を遺憾なく説明する好適例にもなるものとして其の姿は想ひ出されて來た。

職業の自然律

適材が適所に置かれ、而かもその長所は益々發達せしめられて行く。鶴の脛は長く、鴨の足は短い。異色まぢまぢであるところに却つて自然がある。斯くてこそおのおのの、其の擔任者に於ても、與へられたる責任の満足を感じ、努力に對する自發的の奮勵がある。斯くてこそ、其の事は却つて全般的には平均した文化の發達を遂げて行くのである。何故ならば局部局部の優秀なる發達無くして全部の優秀はあり得ないから。そしてこの自然律に従へば、其處には局部局部の職業の優秀を統一する優秀なる連絡綜合係の職業者さへ見出さるる筈なのだから。

人類對自然律

だが、これは原始に近い一時期に於ける職業分布の現象である。既に社會が封建時代に入り職業の世襲制度が行はれ、權力によつての分擔強制が行はれ出しては、忽ち崩壊せざるを得ぬ儚き一現象であつた。人爲に對して歪み易き自然律であつた。何と脆き自然律であることよ。

あることよ。

自然律と言へば千古不磨の鐵則であるかに考へらるる。而かも斯くの如く崩れ去る。此の矛盾を如何に觀るべきか。

自然が、若し自然のみで宇宙に存在するものならば、所謂自然律なるものは毫厘の差なくその運行を涉らせ行くであらう。然し其處に人間といふものがある。人間には智情意があり、自意識がある。それを持つ人間と、それを持たぬ自然と、等しく宇宙に併存して、對立矛盾を生じない譯はない。人間が未だ人間的の發展を進めず、自然に近く、自然に動かさるる分量を多く占めた時代には、自然律は人間を容易く支配し得た。然し人間が自覺に立ち、自らの計畫的欲望の下に行爲を始むるに至つては、彼の意志は却つて自然を征服すべく溢れ出した。謂ふところの自然律は萎縮せざるを得ない。人間が自然を征服する、これを文化と言ふ。斯う言つた西洋の哲學者もある。だが尙よく考へてみるのに私達も自然律と認めるところのもの何程か眞の自然律なるや疑を挾まざるを得ない。何故ならば、すべては私達人類の認識範圍にて認定するところの自然律だからである。そして私達

人間、自然征服

人類の認識標準は決して一定不變のものではないからである。私達人類の認識範圍の擴大發展につれ、かれも亦存在條件の風貌を變へて行く。

たとへば自然律の發見をもつて最直接の目的とする自然科学に於てすら、かのダウキンの進化論は今日の學者に於て屢々疑をかけられ、種の起原説、適者生存説等は可なり反證を擧げられつつある。

常識の概念としては、或範圍内のものを自然とし、其處に行はるる法則を人間に延長應用し、これを自然律と唱へるのは便利ではあるが、然し最も嚴密なる論理的、哲學的の言ひ方からすれば、自然と人間とは區別し得られなくなり、人間認識界の範圍より跳出し得られざる意味よりしては、自然も亦人間の一部であつて、彼はただ人間に取つて不隨意筋的存在に過ぎないと言ふだけである。これ所謂主觀論的哲學觀である。反對に自然を中心として人間を顧れば人間の自意識、智慮、判斷力まで自然の一部であつて、自然の埒外へは一步も出られない。これ所謂客觀論的哲學觀の出立する所以である。

自然と人間との存在の奥に兩者に通ずる一元的の要素を想定する。そして其處に萬事の

主觀論

客觀論

實在論 意義の出發點を置かうとする。これ所謂實在論である。

何れにしても人間對自然律論の關係は、その境界線を常に搖り動かされつつ相關的關係を保ち、無限の展開の道途に於て私達の智識の線上に觸れつつあることを否み得ない。此の點よりすれば、今日自然律と見るべきものの威壓も、また人間自我の欲求と稱せらるるものの主張に就いても、相當餘裕を見込み、寧ろ直觀の裁斷に此の兩者の區分は比較當面の信用が置かれるやうである。

近世の職業

論旨は再び繼續されて、近世に入ると社會諸制度は、自由と競争を認め、職業の採擇は極めて自由になつたやうではあるが、一方それだけ餘計に各個の侵蝕範圍も容易を加へ、且つ生活的經濟的諸事情も複雑を加へ來り、これが機械的に個人の意志を掣肘することも多くなり、今日では個人の職業を定めるにも、社會的諸事情が、個人的事情よりも強く影響を與へる有様である。

職業と天分

然しながら、私は如何なる場合に於ても、其の人の天分に職業選擇の力點を置きたく思ふ。天分とは何か？鶴の脛を長からしめ、鴨の足を短かからしむるところのものである。

同じ植物ながら、一つを松たり、一つを杉ならしむるところのものである。難澁なる哲學的考慮を経ずとも、眞にその事に従はざるを得ざらしめ且つその事に従ふことを以て無上の満足感充足感を覺えるところのものである。その満足感や充足感は、必ずしも愉快を伴はないかも知れない。時には苦痛を帯びるものかも知れない。然しそれが如何と言ふべきぞ。眞にその職業に對して自ら選ぶと同時に、また天地によつて選ばれたと言ふ一種の眞い宿命觀に立つものは、事の成敗利鈍は問はないのである。蠶が桑を食むが如く致晝、致夜ただ食むだけを念とするが如く、ただ、その事に當りつつあることだけに總ては在るのだ。蠶が桑を食むことに注專しつつある其の事の上に、蠶はやがて糸を吐き繭を作るに至るは備はつてゐる。私達も同じことである。私達が眞に天分に動かされ職に従事する場合に、従事しつつあるその事の上に總てが在る。必ずしも將來への期待、約束を必要としないのである。期待約束は自ら只今の従事の中に含まれてゐる。

此の説き方には甚だむかしの道學者めくものがあるが、原理はいつも新らしい。酸素が酸素として出發し、水素が水素として出發さるる場合には、どの視野より眺めても最價値

的である。其處に是非を離れた強味がある。何故ならばそれ以外何ともならないからである。ただ此處に實踐上の問題として次の數點が疑問とされて來るだらうと思ふ。

天分と發見法

第一に天分を如何に發見すべきか。

天分を自分で發見するものもある。幼時より嗜好と結んで既にそれが性格上に露顯してゐる人である。斯ういふ人は職業の選擇上、主觀的條件に於ては簡單である。乃ち嗜好に従へばいいのである。青年期、壯年期に及んで發見するものも同じことである。それまで茫漠とし、または誤つて熱中してゐた職業を撤回し、新しく發見した本質的の嗜好の赴く職業に就けばいい譯である。

天分を他より發見さるる場合がある。自分では、餘りにその事が容易なる爲敢て優質なりとも特性なりとも氣附かず、他より指摘されて始めて氣附くものである。斯ういふ人は自分に困難を覺える職業を却つて本分と錯覺し、強ひて苦闘するところに悦びを見出しつつあるやうな場合もある。

天分を自らも發見し得ず、他よりも認められ得ない人がある。所謂十人並か、或は平々

職業の價値

凡々と呼ばれる人である。斯かる人は、その自由な適應性を利用し、社會上の職業層に於て人の配布が最も手薄な部分と思はるる所へ向け進出すべきである。なほその所の職業が將來、社會によつてその必需性を保せしめらるるや否や、これも合せて考慮に入れる必要がある。現在よくとも將來望み少ない職業は、職業を生活を支持するものとして採用する場合には危険であるからである。なほ附言して置くことは、およそその價値を判定するには二つの標準がある。絶對的のものと、相對的のものがそれである。此處に一つのものがある。そのものを、そのもの獨特の立場に置くときは、宇宙の一存在物たる資格に於て無限無窮の背光を負ひ、その價値は高低を超越して絶對のものとなる。これ絶對的價値である。今もしこれを人間の使用圈内に持來して、人間生活上の寄與如何の効果が論ぜらるるとき、此處に始めて對人間の關係價値が附與せらるる。而かもなほ、其の場合に於てさへ人間の需要の程度の如何の差によつて其の價値は増減せしめらるる。或は需用者が需用するときの諸條件の如何によつて價値は變つて來ると言つてもよい。例へば此處に一卷の哲學書がある。人が眞理を求めんとする場合には此の書はその人によつて最貴重

として價値附けられるけれども、人が旅行せんとして其の旅程の相談者を求むる場合には哲學書の價値はゼロであるやうなものである。此の場合には一葉の旅行略圖の方が遙かに貴い。人に於ける職業の價値も同じことである。普通凡職に従事する凡人と觀らるる人も、その職と人のみを獨立に於て考へるとき絶對である。優劣を寄せつけない位階である。何故ならば最も嚴密なる意味で、其の職業を執行するその人は、何人と雖、代行し得ざる特色を有するからである。これ絶對的價値である。いま、これを社會の需用圈内に持來して、其處に相對的價値判斷が生ずる。而かも時と場合、事情によつて低くも高くもなるものである。即ち需用の諸條件如何の差によつて、價値はいくらでも動く。例へばナポレオンにしたところで三軍を叱咤するとき彼は不世出の名將であるけれども、私達が若し裁縫の代りをして貰はうとするととき大概な、まづい仕立屋さんでも、かの名將よりは頼もしいのである。此の意味よりして、凡人凡職決して卑下悲觀する必要はない。時と場合と事情を辨へさへしたら、彼はナポレオン同様、いつも自尊心と自信を失ふことはない。まして幸福といふことは却つて常人の生活に恵まれ易いと言ふこともあるから、此の方面から

も彼は自分に生甲斐を見出さなくてはならない。

天分と職

業と一致

するか

第二に天分と職業と一致するかの問題である。

職業と言へば、既に社會的需用を見越して其處に執り上げらるる業務である。即ち對他關係を有してゐる。抽象的哲學的の價值論よりすれば前述の如くに絶對獨立の場合の職に於ける人を論定し得るけれども、具體的實際的としては、他に支配せらるる關係にある能力である。需用せらるる職業ほど、職業として能力的であり、需用せられざる職業は、職業と言ふを得ない。職能とでも呼ぶべきものか。

一方、天分は必らずしも對他關係を持たないで成立する。天分は社會の需用を前提として生れ出たものでないから、場合によつては社會に取つて非經濟價値に思へるやうな天分さへ存在する。故に結論としては、天分は職業たり得ることもあれば、職業たり得ざることもある、と言はなければならぬ。

然し、少しく眼を高くつけて考へるときには、此の世界に於て、何物たりとも絶對に無意義なるものはあり得ない。それを有意義たらしむべく、それはただその利用法如何に係

る。例へば雷霆の如きも、これを放置するときは無意義以上、惡害をもなすものであるが、方法を用ひてこれを馴致導用するに於ては、人間生活必需の作業をなし、電燈ともなり、ラヂオの娛樂さへ提供する。此の意味より言へば、如何に非職業的の天分たりとも、導くに法を以てすれば實利實益に化さぬものとも限らない。故に天分を有つものは、如何にそれが非通俗的のものであり、非實用的のものたりとも、忽ちに社會との絶縁を決意せず、常にそれを利用し、社會福祉を増益すべく職業化さんとする方法の準備を研鑽すべきである。考へ方によつては、社會に直接必要な職業は、既に消費せられつつある實益であり、社會に間接必要な職業は、なほ蓄積せられつつある實益と觀らるるところもあり、此の觀方からすれば、社會により間接なる職業ほど原理的、基本的、將來的、全人類と言ひ得らるる道理もあり、例へば臨床と病理研究との關係の如く、今差し當り一人の病氣は癒さずとも、將來萬人の健康の基を拓きつつあるものかも知れず、人おのおの天分に従つてその長所を活すに足るものならば、直接間接に論なく何れの職業をも自由に選擇採用することの上に、自らも重大なる確信と抱負を持ち、社會も許容獎勵せんことを望

まじき限りである。これ人物の能力經濟に於て最も當を得たものである。

職業と生活

第三、職業と生活は一致するか。

私達の生活を解剖してみると、其處に幾通りもの生活が重なつてゐる。一個の人間として營む生活、家族の一人として營む生活、社會の一員として營む生活、若し職業があらばその職業上の生活、思考の生活、慰安の生活、等々。

然し此の論段の階程に於て重要なのは經濟生活である。そしてそれと職業との關係である。今少しくこれに就いて述べよう。

社會對個人間に行はれる經濟事情の諸理由により、個人への職業と個人の經濟生活と、圓滿なる場合がある。また圓滿を缺く場合もある。後者の如きは現に失業者の多い今日に於て、頗る緊迫重大なる研究問題となつてゐるが、只今は暫らくこれを社會學、經濟學、その他専門家の誠實なる検討に譲り、一時も早く穩當適切なる手段により爲政家と相俟ち善局への打開を祈つて止まざるものであるが、原理としては萬人、天分と職業と一致し、職業と經濟生活とは一致するのが望まじきことであるのは言ふまでもない。然し此の事を行

原理の理想性

はれるのは遺憾ながら、如何なる時代でも程度問題といふ言葉の意味が含む範圍内のもので、この原理通り完全に世の中に行はれた例はあるまい。此の點此の原理は一種の理想でありユートピアである。然しまた、原理なるが故に、如何に迂遠曲折、波瀾重疊の社會狀態でも、その中を滑り抜けて、一路その方向を目指す不折不撓の推進機であり且つ方向舵になるものである。此の點に力を得て私達は、たとへ職業と經濟生活の不一致の場合にも落膽せず、空しく焦慮せず、需、不需、如何に係らず信念としての職業生活は常に職業上の技能の修練向上が肝要である。これまた古い道學者の口振りのやうではあるが、蓋し此の一法、職業の自價値經濟論として、古今を通じて誤つてゐない。まして職業と天分と一致したものは職業の推蔽によつて天分は取出されて來る道理があるのだから、自我完成の上より見ても損はないやり方である。

人生の大方針より論ずれば、事は甚だ簡單である。私達の天分と稱せらるるものは、宇宙の無限の發展力を個性内に、自然發生的に——勿論生理學的には遺傳や胎生中の影響もあるが、それをしも宿命的なものとして——賦與せられたものであり、その天分は私達

に職業を取り上げさせ、職業は私達個人と社會とを技能的經濟的に關係を結びつつ、また社會それ自身の胞内に内在する文化への無限性發展性を引發して私達内在の無限性、發展性と呼應させる。斯くて私達と社會とは職業によつて相即的關係に置かれつつ無限より無限への文化發展の途に就く。私達個人と社會とをその旅程に於ける旅車の双輪とすれば、職業は二つの輪を貫ぬく車軸である。車軸は自ら車輪に運ばれつつ、而かも車輪の廻轉を交結し、廻轉を圓滑進行せしむる資格と作用がある。そして此の旅車の車體は何か。宇宙生命の現象性である。旅車を牽くものは誰か。宇宙生命の實在性である。

青年時代より壯年時代へ

結婚

私は數十行前に記した約束によつて、結婚論を検討すべき段階に立つ。

「結婚は戀愛生活の閉幕である」と或文學者は言つた。「結婚は自由の墓穴である」とも言つた。いづれも赤熱奔放の愛情生活を閉止し、互ひに拘束の生活に入ることを言ひ現したものである。前者はそれを時間的に表現し、後者は質的に表現してゐる。

結婚は一の閉幕であり、一の墓穴であるには違ひない。然しまた他方、一の開幕でもあ

り、一の誕生でもある。それは何かと言ふに、夫婦愛と言ふものである。

社會に行はれる結婚にはいろいろの種類がある。媒酌結婚と稱するものの如き、或は持參金目あての結婚と稱するものの如き、その他家門の爲、門閥の爲、放蕩防止の爲、詮索するまでもなく、擧げればいくらでも列記することが出来る。だが、それ等は複雑なる世俗的心理の因子が含まれてゐる結婚であつて、純粹なる結婚を考へる場合には適切ならざる材料である。よつて此處には夫婦愛を基礎にする結婚に就いて考察を進めて行きたいと思ふ。

夫婦愛

夫婦愛とは何か。英語で言ふところのベター・ハーフであらう。一個づつの男性と女性^{ポテンシャル}が互ひに全部を諒解し合ひ、一身の如くに融合投歸する心理の三昧境であらう。世には事業その他の關係に於て二個の男性或は二個の女性が互ひに意氣投合して一體となる場合もある。これもベター・ハーフではあるだらうが、夫婦愛とは言はない。故に、いくら一心同體の現象を呈するも、その契機はどこまでも性の相違を條件とし、その條件の爲に相牽引する心理的な^{ポテンシャル}力であり、而かもそれでありながら自由な男女間に行はれるもの

とも違ふ愛情である。これが即ち夫婦愛である。その牽引する理由としては肉體的なものもあるであらう。然し夫婦は夫婦間の諸経験を經驗し行くにつれて、おひおひ、ただの男女間に惹起さるる——必ずしも夫婦といふ關係を置くことを要せざる性的牽引は、無駄なものとして省き去つて行き、遂に夫婦關係ならずしては締盟し得られざる一種の性的關係、即ち最も洗煉された性的關係、最後には肉體的關係さへ離脱する性的關係のみを残すやうになるであらう。

私は此の關係を考へて、一個の紳士が持つ彼の女友、一個の淑女が持つ彼女の男友、即ち一般に「異性の友」と呼ぶところのものに、所謂エロチックの意味を控除したその性的心友の心理關係に近いもののあるのを感じる。D大學の創設者であつたN氏夫妻は、日本の基督教徒として模範的夫妻の評判高かつた人だが、その夫妻の交情を見るのに、それは師弟の如く、兄妹の如く、友人の如く、また母子の如く、而かもその間にまた夫婦の情合ひの濃やかなものがあつたと觀察者は書いてゐる。恐らく現實上の夫妻としては極致に近く達した夫妻であつたらしく察せられる。

夫婦の誓約

夫婦は一つの誓約である。互ひに許し合ふことの繼續を、永遠の繼續を、何等かの權威の前に誓ひ、併せてその保證を求めるのである。或は神佛、或は法律、或は社會的習慣等、その選擇はいろいろ變るかも知れないが兎も角、第三者の立會ひを求めて、結婚當始の意志の繼續を記録するのである。世には情意投合、或は内縁と稱する夫婦もあるが、その形式は如何にとあれ、その關係内容が眞に男女兩者に於て夫婦たるべく心情の發露し來りし場合は、獨占的に且つ可及的長時の期間を希求しつつ互ひを許すといふ意志の互諒はあるものと見なければならぬ。結婚にあつて意志の互諒といふことは、その心象それ自身消極的の一つの誓約である。互ひに不諒解を來らせまいと言ふ默契を帯びた、不文律の誓約である。而かもその上、その意志は獨占的、可及的、長時間等の制限的諸條件を含む以上、いよいよ双者に何等か心理上に於ける約定の把握が必要となる。口で明かに言はずともである。但此の際、發露した互ひの心情そのものは、誓約には無能力者である。何故ならば、感情そのものは時間的及び空間的には何等の把定力も持たない心象だからである。感情そのものは自由に發露し變易し消滅し、決して責任を解しない權利ばかり主

理智の變
壓力

張する我儘な自然兒だからである。此處に發露した感情そのものをよしと認め、その時間的、空間的存在を計畫する批判的、功利的、方法的能力者は、理智だからである。而かも此處に對象として考へてゐるところのものは單なる感情の問題ではない。夫婦としての責任問題、束縛問題を眼前に控へての上での感情である。これはどうしても内容的に理智の變壓力、制動力が混つてゐて始めて意志化さるる感情と考へなければならぬ。

そこで、斯ういふ形式の夫妻者はどういふ様式に於て夫婦たるべき意志を誓約するかと言ふと、その誓約は、或は言葉に現はすこともあるかも知れない。或は默契の上で、或は直覺的に、互諒するかも知れない。その何れの途を執るにしても兎に角、互諒の中に誓約は含んでゐるのである。その誓約は矢張り普通の結婚同様、第三者の前に於て結ばれるのである。その第三者と言ふのは誰か。それは互ひが、互ひの心性中で最も信頼するに足ると思はるる心性を立會人として保證さすのである。それは「まこと」と名附けらるるものかも知れない。それは「意地」と名附けらるるものかも知れない。それは「義理」と名附けらるるかも知れない。より低い心證としては、或は利慾、或は虚榮——さういふものを保

證者としても、互ひは互ひの心情の意志化を誓約する。若しその人の心性中に於て感情よりもその性質の方が頼み得べしと認めるならば。また、たとへそんなものを頼みにしてなりとも尙、夫婦たるべく發露した心情の願ひが強いならば。

要するに結婚は束縛である。責任である。一個の男性が、一個の女性と束縛し合ふことである。彼等にはもう性的愛情の自由はない。それは兩者間にのみ授受を限られるのである。また彼等には連帶責任を生ずる。社會上の責任はもとより相互間のみだけのものにも責任は連帶する。肉體上の健康の責任、精神上苦樂の共擔。だが彼等はそれを敢て擔はうとするのである。少くとも結婚の意志表示の當初の心情に於ては。だが、それくらゐの情念は自由戀愛に於てもあり得る。いとしま愛し合ふものは、われを捨てても彼の總てを負擔せんとする。彼の全部を、われの責任に持來さうとする。ではどこに自由戀愛と結婚愛との差別があるか。

自由戀愛
と結婚愛
との差別

私は此處に於て、結婚はいよいよ契約による意志繼續の願ひであると言ふのである。若し人間の感情が冷熱なく、變化の無い性質のものであつたら、人は強ひて結婚といふ

形式を取り上げはしまい。感情は冷め易く、變化し易い性質を男女は知つてゐる。意識しなければ無意識の敏感に於て知つてゐる。よつて男女は結婚する。此處に二人の男女があつて愛に陥る。若し感情に冷熱なくば、其處に起つた男女間の愛は精力不減衰説の如く、永遠に同じ熱度を保つて二人の間を繋いで行く。その愛情が、全人格的のものならば、全人格的のままで歳月を経て行く。此の際、男女の二人は、二人の間の關係を保つ爲に何の精神的、肉體的工作も、その愛の上に加へる必要は無いのである。二人の愛情が、若し全責任の共通と、全束縛の甘受とを悦ぶものならば、それは結婚せずとも、その状態は繼續して行き、夫婦の名を帯びずとも實質的には夫婦であるのである。何を今更さういふ契約を必要としようぞ。だが、感情くらゐ計り知られぬものはない。まして人生の行路上には幾多の事情の突起が豫期され、他よりも二人の結婚は脅かされ易い。即ち權威ある第三者の立會ひを得て、意志繼續の希望に確實性を附與しようとするのである。「結婚は戀愛の閉幕」といふ言葉の意味が含む結婚の場合は、男女が互に彼等の間の自由戀愛をあらゆる角度から試してみ、最早や試みる戀愛上の新鮮さも無くなり、魅力も無くなつて

「結婚は
戀愛の閉
幕」

しまつてゐる。けれどもこれまでの投因によつて切つても切れない何等かの縁が、二人を繋いでしまつてゐる。其處で其の縁を結婚に形式化した場合である。そして若し此の種の新婚の男女に於て、夫婦愛なるものを従來の戀愛の如きものと心得て、多少なりとも夫婦關係の上にそれを呼び覺さうとでもするなら、それは全然失敗に終るだらう。何故ならば此の種の愛は最早や彼等の間では使ひ切り、經驗し盡したものだからである。此の男女にして若し他の種の愛を彼等二人の間に創造し行かうと決心する場合には、情緒生活の上に新生面は拓かれて來るであらう。創造せらるべき夫婦愛とは何であらうか。それは無我への没入である。彼我の差別を撤廢する献身的心行である。

これを戀愛時代の盲目的灼熱状態に在らずして行ふのである。性格の全部的諒解を愛の種子として冷靜に互の爲に犠牲たることを樂受するのである。其處に兩者間に深い理解と省察の繰り返へしが要することは勿論である。此の意味に於て「結婚は閉幕」と言ふのは、頗る重要な内容が籠められてゐる。

然し、普通の結婚の場合には、その前提に、前に説くところの如き自由戀愛の糜爛は無

「結婚は
閉幕」

いのである。双方、一心同體となつて人生を負擔して行く相手として互ひに満足なる資格を認め合ひ、互ひの個人的獨立を撤廢するのである。撤廢を誓約するのである。一箇一箇の祕密を撤廢して、改めて二箇合體の上の祕密に立籠らうとするのである。勿論この場合、心身上の行態は必ずしも智囊を絞つてするところの批判、計畫の結果のものばかりではない。純粹と感ぜらるる愛情が、すべてを推し進め、すべてを具體化するかも知れない。その愛情の熱烈奔騰せるものに至つては敢て戀愛と變らないものがあるであらう。前後不覺に一緒になり度いと衝き進むのが情の自然かも知れない。然し最も嚴密なる意味から言へば、戀愛と結婚愛とは分類せらるべきであらう。その要點を言へば、戀愛は男女當事者の間にだけ行はるる感情の締結であらう。結婚愛は男女當事者間によつて締結される感情契約には違ひないが、更に其處に人生の負擔といふ大責任を豫期し、それを擔ふに足りるだけの資格をも考慮に入れて、その要素をも含めての愛情進出である。豫期せらるる人生の負擔の形に於てはさまざまあるであらう。彼とわれと等分に擔ふべしと感ぜらるるものもあるであらう。彼擔ひわれ助け得、と感ぜらるるものもあるであらう。われ彼の助けを得

結婚と人生負擔

て、われ人生を擔ひ得と感ぜらるるものもあるであらう。いづれの比率によるにしても兎に角、結婚することに於て初めてその負擔力の自信を得ると覺悟せらるる心意識である。その等分に擔ふべしと感ぜらるるものさへ、若し結婚せずして個々に在らば、その等分の負擔力も覺束なく感ぜらるる性質のものである。結婚することに於て初めて等分の負擔力を推出し來る運命の性質である。

男優りの女

或は難する人があるかも知れない。例へば氣丈、男優りの女が、劣弱なる夫を得つつある現象の、その何處に人生に對する負擔力の豫想的考慮が結婚愛に含まれるかと。だがそれも亦、矢張り立派に右の論斷の立證たり得べきものである。かの男優りの女が、假りに彼女同様の強氣の夫と結婚するとせんか、その時彼女は夫に頭を押へらるるのである。頭を押へらるといふことは、ヴァイタル・フォースをエネルギー化さない部分を生ずるのである。結局彼女としての人生負擔力を夫によつて弱めらるるのである。反對に彼女が劣弱の夫を持った場合には、その夫をいたはり、庇ひ、補足する爲に彼女のヴァイタル・フォースは遺憾なく消費され、或は彼女自身さへ思ひがけないと思はるる潛勢的生命力

さへも引出され、使用されるかも知れない。それ等の力が現實的に具象化されることは取りも直さず人生を負担することである。人生と言つても、現象的にはさうさう取り仕切つた、構へのある人生らしい様子を以つて向つて來ない。日常生活の俚事、卑事に如同して來るのである。乃ち彼女は無意識にわれを忘れて夫を手助け、夫を鞭撻すべく、喜怒哀樂しつつあるその事の上に、人生は執行されつつあるのである。そして彼女に取つては、斯かる性質のコンダクターに依つてのみ彼女の人生行進曲をいとも華やかに奏樂し出すことが出来る。人生の祕密はまだなかなか闡明されてはゐない。此頃醫學の方で、人の血液型を四種類に分け、遺傳をも證明し、血液補入等にも實効を擧げてゐるが、更に進んで此の血液の差別によつて性質をも鑑別し、天分をも窺はうと研究に着手しつつある學者もあるが、其の努力は多謝に値するけれども、どの邊まで人生の祕密の謎を解き得しや否や、蓋し將來に期待せねばならぬところが相當に多いことであらうと思ふ。指紋學、新性相學等此の目的に向つて探針を下す新科學も生じ、いづれは各方面の研究が綜合され、剝一剝、祕密の實相は明かにされて來ることと思ふ。

血液型

陰

陽

人の性靈を電氣の如きものとする、人々の特異性の千差萬別に従つてその種類も千差萬別であることは判り切つた道理であるが、而かもその特異性を諦つて普遍性を求めるにしたところで、電氣のやうにさう簡單には大別出來難いと思ふ。然し普通東洋の習慣では、性を大別して陰陽とし、更にその中を個性附けた普遍性として、木性、火性、土性、金性、水性、としてゐる。西洋でも同じ星占學の原理から星と個人の性質、運命と關係あるものとし、神祕的な分類を施してゐるが、事實、人間の本性なるものは大概いろいろの性質のコンビネーションから成立してゐるもので、ただその人に取つて或性質がやや主成力を古むると言ふだけのものに過ぎない。また一人の人でも、その性質はその發動する對象によつて違ひ、例へば他のことに對しては極めて氣短かな癡癡持ちも、釣りの遊びにだけは白痴になつたと思はれるほど、悠長になるといつた工合に決して單純なものではない。要するに複雑中に一種基調と認むべきその人のカラーを感じ、その人の性格を解すべき参考とすべきである。

夫婦生活

一人の人に於ても既にさうした複雑性がある。若し文學的に言へば「一人の中に數人の

の複雑性

人が居る」と言ひ得る。ましてそれが二人の對立となり、その間に男女性の異別も加はつて來るのだからその錯雜變幻さは計り難いものがあるのである。よく社會に、あんなに始終喧嘩して居て、どうして夫婦になつてゐるのだらうと言はれるやうな夫婦も在る。

夫婦喧嘩

また殆ど肝腎なことに對しては、談し合つたことの無いと言はれる夫婦も在る。斯くして而かも夫婦愛は立派に通つて居るものもある。夫婦喧嘩は迂闊に仲裁出來ない。「夫婦の仲が直つたあと、きつと仲裁者は二人に悪口を言はれるから」——斯う言つた意味の言葉が下町の庶民階級の間で言はれて居る。蓋し夫婦合あひま性の祕密を多少穿つたところの言葉である。

論旨は、本旨に戻つて、私は結婚は契約であると言つた。男女二人が悦んで束縛に突き進み、相互に一祕密を保ち合ふ一人格となつて人生を負擔しようと言つた。その決意の繼續を權威的な第三者の前に誓ふのであると言つた。さうすることを餘儀なくさせ、または必ずさうせざるを得ざらしむる衝動を起すものは無論、互に對者に向つて惹起した愛である。性的愛情ではあるが、而かも對者の全人格を信じ切り安心立命を對者の上に見出し

得る希望が可能と認められての上の愛情である。

何故人間は夫婦になるか

ところで斯かる愛が、何故人間に發動せしめられるのであらうか。言葉を換へて言へば、何故人間は夫婦になるのか。

生物學の方面から言へば、種の繼續の爲と言ふかも知れない。それも一理だと思ふ。經濟學から言へば生活能率増進の爲と言ふかも知れない。それも一理だと思ふ。生の孤獨を慰め合ふ爲、柔剛の性の調和を得る爲、……………

男の肋骨

いくらかでも説明はある。そしてその一々が正しき理由である夫婦も、多いことであらう。然しながら尙、そこに全體を擱んでの上の解決と認められざる孤立的説明の感がある。此處に於て私は、かの神、男の肋骨の一つを取り、これを女に造り、男に妻として與へ、永遠にその伴侶たらしめたといふ古代神話を以て最も單純素朴に、而かもよく此の理由の全部を解明したものと思ふ。此の神話は夫婦なるものを、原因より結果に向けての形に於て説明はしてあるが、その意を汲んで現實に於ける夫婦なるものを釋く場合には、逆に結果より原因を顧る理路を執る方が便利のやうに思ふ。乃ち現實の夫婦なるものは、その精神に

古代的直感

於ても肉體に於ても差別の姿を取つて居るものではあるが、夫婦愛の本能種子は人生行路の逐次經驗に磨かれつつ、その歎慕求願する完全なる兩者の一致へ向けて兩者を押し進むものである。そして兩者の完全なる一致状態に達するまでは——それは一肋骨がその缺けた人間の腔内に歸位すると等しく——あらゆる牽引衝入の試みを試みるものである。勿論、此の神話には、右の現實的夫婦關係の説明をも簡單に敷衍してあり、此の神話の作者が現實の夫婦關係を観察し、その鋭い詩的な古代的直感を働かせた結果として、及び夫婦關係上に置かるべき倫理道德を權威付けるべき必要から、此のロマンスの筋の構造を喚び起したと察せらるる節は充分あるのであるが、而かもストーリーの抽象の仕方や、相對と一致との關係の比喻の仕方に満點の自然さがあり、最も根元的本質的に描かれたる夫婦の姿として、餘蘊なき繪畫的ストーリーである。今日なほ象徴に却つて實相の表現力あるを認むる人々の間に此の神話の魅力あるは、もつとものことである。

いま此の神話の示唆するところの夫婦關係を義とし、これに據つて論旨を進むるならば、中に特に研究の必要なる二點が見出される。其の一つは、夫婦はその愛によつていつ

夫婦は何時一心同體たり得るか

完全に一心同體たり得るか。其の二は、一心同體になり得し後、果して如何。

夫婦は其の愛によつていつ完全に一心同體たり得るか。此の第一の問題は可なり自我と言ふ問題と關係がある。

自我

自我とは何か。他と比較して獨特の吾れ在りと信する意識であらう。次に此の信する意識を基點として、其處にその意識を擴大伸長せんとする功利的の意志を指すのであらう。

ニーチェ

自我の完成に就いては從來兩極の主張がある。その最も積極的なるものは、獨逸のニーチェの唱へたもので、自我を全く他と儕輩なきに至らしむる程度にまで卓拔秀出せしむるもので、常識的の批判を嘲り絶對孤獨の尊貴に立籠るものである。其處に一個の伴侶も無き悲痛寂寥感の伴ふのは理の當然である。これ彼の主張する超人思想である。

寂滅思想

その消極的なるものは、小乗佛敎の寂滅思想である。人間に毫厘も個我の氣を帯ぶる間はそれは苦樂を招く因となるのである。絶對の自我灰滅を以て第一義諦と做すのである。積極消極の差はあるが、共に尋常の自我を抜け出でて自由なるものに到達せんとする願

ひは一樣である。これを以て見ても私達が抱く尋常の自我感なるものは、私達に取つて一種のブラウドを持たせ利己心を満足させ、個人主義的生活を充實する上に張氣を持たすものには違ひないが、同時に他との協調を嫌ひ、屢々他との間に圓滿疏通を缺かしむることの爲に頗る不自由、不幸なる人生生活を喚起するものであることは見逃し難い一面である。ただ右の超人主義や灰滅思想が果して此の自我苦を救ひ得るや否や、佛教に於ても後に大乘思想の擡頭し來りしことは、それを不満と感ぜしに因る。

「愛は惜しみなく奪ふ」此の言葉は近年情死した文學者A氏が、其の著書の一つに題したものであるが、其の著書の内容とは離しても、よく自我と愛との葛藤矛盾を道破した言葉である。自我は束縛を嫌ひ、謙卑を嫌ひ、自意識の忘失を嫌ふ。然るに愛は纏縛し、足下にひれ伏さしめ、恍惚たらしめようとする。若し二つのものが正面から向き合ふときは、其處に衝突と克服が行はれるのは理の當然である。十九世紀の人間史は自我の發達史とも見らるる。自覺めんとする自我の性と、眠らんとする愛の性との間に、幾許の苦惱煩悶の旋風が渦巻きしことぞ。また十九世紀の文學史は自我と愛の闘争史とも見らるる。

「愛は惜
しみなく
奪ふ」

それ程此の問題は此の世紀の間をかけて心あるものの心力を傾かしめた問題であつた。遂に文學者の一人をして悲痛なる聲を以て「愛は闘争だ」と叫ばざるを得ざらしむるに至つた。世紀末より二十世紀にかけて經濟問題、生活問題は屢々人々をして自我の獨尊を固守せしめない趨勢になつて來たやうではあるが、而かも一度覺めた人類の自我觀は再び盲目に還るを許されない。人々は此の意識に醒めつつ、而かも劃一的の時潮に押し流されつつある状態である。

二人三脚

普通に自由意志より出發した、戀愛と呼べるものの上にさへ自我との相反性は斯くの如くである。まして契約を結び二人三脚の精神的束縛の姿態を執つて、障害物競走に似たる人生のコースの上に疾走を期す兩性である。餘程巧みな自我の始末を考へ行はざる限り互に負擔となり邪魔となり、競走のスピードに影響して來るのは明かである。そして通例結婚後近くに於て此の矛盾を露呈し來り、兩者が懊惱焦慮を始めるのは結婚後二三年或は三四年を経た後の所謂結婚倦怠期を以て初發症となし、なほ時を経、折に觸れて再發、

結婚倦怠

三發し來る場合もある。結婚倦怠期なるものは、結婚した男女兩性間に於て始めて接觸した互ひに異性としての精神的肉體的の謎を徐々に知解して行き、もう其處に互ひに異性としての好奇心を失ひ、従つて魅力も無くなり、只在るものは互ひの頑な自我ばかりと思へるやうになつた時である。快い酔の醒め果てたる如く、美しき夢の消え去りし後の如き状態であらう。そしてなほ次に何等かのパッションを催起すべく努力することに何の手掛りも無く、且つ心身上に絶對の無力を感じる時であらう。結婚生活の危機これに過ぎたるはない。そして此の時期を豫想し、此の時期までを結婚生活の華とし、此の色香のみ味ふべき制度を考へて或は自由結婚、或は友愛結婚などと言ふシステムも生れたのである。

友愛結婚

然し私に言はしむれば、此の時期までの彼等の生活は實は眞の夫婦生活とは言へないのである。結婚の形式の下に行はれる男女生活なのである。故に、其處に性を異にする未知の爲に互ひの間に惹起された情熱は、既知に達すると共に一應清算されるのである。そして其處に赤裸々な人間と人間とが對立するのである。そして此の對立した實價と實價と人間同志が、人生上に握手する縁力ありや否やを公平に評價され出すのである。若し其の

新婚と結婚

二人が此の位置より一步だに踏み出し得るなら、それこそ眞に夫婦たる資格を持ち得るのである。一度實量と質量とを検討しての交渉開始であるから、その多寡に誤算はない。夫婦の信頼なるものはここに於て始めて締結される。私はこれまでを新婚生活と呼び、そして此處より出發するものに對して始めて結婚生活と呼ぶを至當とする。

私は新婚生活は其の名の響きが持つ如き、華やかさ、匂はしさ、また純眞な若さが籠められてゐる若人達の至情生活であり、其の幸福も其の信愛も、人生の至寶の經驗として何人の上にも一度は恵み來らんことを祈るものではあるが、同時に人生は——夫婦生活は斯くの如き状態の永續すべき性質でないことを慮り、敢て多少の冷酷さを自分に強ひて、假借なき解剖を施してみたのである。だが、斯くの如き説は、新婚生活者が其の生活中に於て至心にその満足を享受しつつある間は、強ひて聽かせる必要も無いから、ひ事である。そして中には斯かる顯著なステップの踏換へなくして、自然に流暢に新婚生活より眞の結婚生活の永達性へ價值移動を行ふ組もあり、さういふ人々には尙更 unnecessary 苦言である。要は結婚倦怠症に見舞はれし非運者及び結婚生活に就いて多少の疑惑を持つ人々と共に研

究してみるまでである。

赤裸々な
實價

男女が人間と人間として向き合ひ、而かも双者が一糸も着けざる赤裸々な實價に於て評價し合はうとする刹那こそ、世にも悲壯な眞剣な光景であらう。此の時、男には彼の社會的能力も用を爲さない。女には彼女のコンバクトもルージュも用を爲さないのである。用を爲すものは、互ひの愛と人生の負擔力とである。此の時の愛は、性の相違を必要とはするが、最早や單なる男女の愛ではない。ただ牽引である。ただ攝受である。負擔力として認識し合ふものは頼もしいことであり、憐れみであり、いとしみである。

「縁」

だが、これ等の相愛は必ずしも意識に上つて來ない人々もある。また場合もある。ただ何となくといふ感じに於て、此の強力なる電氣の交流が行はれることがある。「何となく離れともない」と言ふ消極的心理に於て、其の内容の根深さを表現するものもある。その神秘さ。寧ろ東洋で使ひ慣れた「縁」といふ言葉が百義を籠めてゐる。

此の出發點より出發したものは、最早や自我の桎梏は問題にはならない。和しつ、争ひつ、恨みつ、嫉みつ、悦びつ、佗びつ——しつある歲月の日常生活を送るうちに、いつ

か弱き自我は強き自我に併呑され行き、或は自我と自我と消磨し合ひ、斯くて一心同體的な一自我を創立せしめて行く。途中、或は彼等の一方が其の失ひつつある自我に對して愕然、失敗反抗の念に燃えることがあるかも知れない。然しこれまた問題ではない。出發に際して彼を彼に娶はせた「縁」は、既定の方針を毫も更へないのである。「縁」は潜在意識下に於て知つてゐるのである——自らを失ふことは取りも直さず彼の全體を掴むことであるのだと。

人或は言ふかも知れない。晩年の夫婦にして毫も融和せず、益々自我を角突き合はせつつあるを見ずやと。だが、彼等は而かも其の形態に於て矢張り一自我に纏りつつあるのである。試みに彼等二人を離して見よ。如何に彼等の様子が張合ひ抜けた單なる半身に成り終るかを。

宇宙生命
の機構

私は此處まで書いて來て、どうしても抽象的な言葉だが、宇宙生命の機構といふ言葉を用ひて人生の全局の指向を標示せざるを得ない段階に達したと考へる。

宇宙を一つの大生命と觀るとき、此の生命にはまた「全」と「箇」との二方面のあるを

諸はなければならぬ。「全」とは生命の體である。實在である。存在である。「簡」とは相である。現象である。當爲である。そして私達人間の帶ぶる生命は、一應「簡」の側に屬する。然しながら「簡」は「全」を仰いで充足擴張せんとし、「全」は「簡」の上に顯現して其の表現行施の實を得んとする。一方からは下降であり、一方からは上騰である。一方からは遠心力であり、一方からは求心力である。而かも此の二つの力は、一つの生命の中に在つては生命それ自身の營みであり相反するが如くして相牽き、融するが如くしてまた離れ行く。斯くて生命それ自身をして無限より無限への向上を辿らせて行く。私達は一應「簡」の側に屬するが、宇宙萬有どれ一つとして此の大生命の影を宿さないものはない。一微塵にも宇宙性を帯びてゐる。此の意味よりすれば私達は「全」の胚種でもある。私達の裏にある全的生命と簡的生命は、宇宙に行はるる生命性と同じ働きをなしつつ私達の小さき生命を發展強化せしむ。自我とは簡的生命である。沒我とは全的生命である。即ち、簡的生命を徹底増進せしめて「全」に達するを期したものがニーチェの超人思想であり、簡的生命を滅却して、全的生命を活さんとしたのが小乗佛教である。然しながら世界

一微塵の
宇宙性

は一人ではない。私達は現實に生きてゐるものである。たとへ我れ獨り斯かる方法に依つて全的生命の宇宙大的意識に達し得たりとするも、他の同胞を如何にすべき、我れ獨り超へずとも此の現實を離れて何の人格完成ぞ。眞に人間を知り現實を知り愛を知り生命を知るものは、また時機を知り程度を知り事情を知り順序を知り比較を知り量價を知るものである。自我を主張すべきには自我、沒我に就くべきには沒我、斯くて總全的の意味に於て大生命の行進に參與すべきである。これ總ゆる意味に於て大乘的と稱するところのものである。

此の事は期せずして夫婦愛の上に行はれてゐるものである。何れか優良強健なる生命は自我となつて其の配偶者を牽引攝受する。弱き生命の配偶者は悦んで沒我し、彼の生命的肥料となり彼に同化融入する。斯くて此處に二人一體の自我を生ずる。既に一體の自我になる上は、其の内容をなす二人に取つては、どちらにも一自我であり一沒我である。自我そのまま沒我でもある。二人に於てのみの全的生命に圓融する。二人の間のみに在つての一人格完成である。

一自我
沒我

斯かる上は、二人一體のままで、或時は一方が自我を主張し、或時は一方が没我に退くとも、然るべき理由と必要とより、しかあるにて、圓融せざる前の自我の衝突とは比較すべくもない。全自由と全諒解を帯び、其の出頭、没頭共に夫婦共同の爲の進行歩幅である。ただこれからは二人以外の事物に對して一自我になつて見ゆるまでである。

夫婦は一心同體となつて後、果して何をなすか

此の二人一體の全的生命は、より良き生命を産み出さんとして更に自身以外のものに向つて努力を始める。或は子供の教育に、或は事業の經營に、人と事物との差はあれ兎に角、自分より派出する簡的生命を産んで行く。派出した簡的生命はまた自我を擴大充實すべく全的生命の完備に向つて、營々其の生活をヴァイヴレートして行く。宇宙の大理想より觀れば、人も生命であれば、事物も生命である。右の理の譬へを示せば、此處に團體の一つの會がある。これは、初め人に依つて作られたるものである。然し其の會が隆盛に赴き、自らヴキヴレーションを起す組織の充實に達して來ると、其の會を創つた人の些の努力も藉らずに其の會は自らの勢に依り、人を入會吸収せしめて行く。始めの「人」は「全」である。彼は抽象的理想を持ち、それを現實上に具現化せんとして此の會を生んだのである。

る。生れた會ははじめ「簡」である。創立者の「全」は派出した「簡」を充實せんとして推挽策勵して行く。而かも此の「簡」は、或る成長點に達すれば自立自營して行く。頻りに他を吸収して自ら「全」たらんとする準備を急ぐ。斯くて最も膨滿状態に達するや、「簡」は自らの内に圓融自由の構造的完極性を感じ、現實上の發展を停止する。夫婦に於ては完全なる一體同心の人格化が完成されたときである。これまで簡的生命たりし此の會は此處に、「簡」に於ての具體的全的生命に達し、「簡」に残るところのものは抽象的理想のみとなる。此處に於て彼は努めずして没我の態度を執り、或は會の次のゼネレーションの人を作り、或は會外、別簡の事業の經營に進出し、簡的生命を派出する。新しく理想の現實化を圖らうとする。

一夫婦に在つても、一團體に在つても、其の他此の世の中のありとあらゆるものどれ一つを取上げて觀ても、——「人」は其の精神と肉體の中に、「人」と「人」と對立すれば其の兩者間に、「人」と「事物」との關係には其の關係上に、縦にも横にも——此の簡的生命と全的生命は働いてゐる。結局宇宙は一大生命網である。此の網の重複の工合と連絡の工

華嚴哲學
天臺哲學

合とを説明したものが佛教大乘經典の華嚴經に於て、「重々帝釋網」と呼ばれるところの哲學體系であり、此の網の隙まり工合と一貫した、力強さと而して其の無限の發展性を説明したものが、同じ經典の法華經に於ける「一念三千、十界互具」と呼ばれるところの哲學體系である。此の説明の詳しいことは餘りに専門に偏り過ぎるから避ける。

箇體出生
の意志

兎に角、人生の觀方に肯定的の見方と、否定的の見方とがあるが、私達が此の世の中に生れて來た其の事が既に肯定的のものである點よりすれば、肯定の爲の否定は別として、全然否定一方の考へ方は誤つてゐると思ふ。人或は、私達が此の世に生れて來たのは自分の自由意志ではない。産んだ者の意志だ、と言ふかも知れないが、それはもう舊い科學思想、自然主義時代までの思想に捉はれた考へ方である。絶対に意志や系統の無いものが世の中に存在しよう筈が無いといふのが、近來證明されつつある科學の諸説の方向である。これに依れば私達の出生も、假令それは出生當時も、其の後も永く意識されず無意識界の膜の中に織り込まれて來てゐるものとしても、それが産む人と相即關係にありつつ而かも自分といふ一つの意志が此の世に出現したのに外ならないものである。産める人の恩に浴し

つつ。故に現に生あるものとすれば、先づ此の肯定の姿を觀て、次に其の内容の肯定的なるものを探り、其處に生命の嚴在を探り當てれば、是非とも其の生命の肯定的、性、體、が合同してゐる宇宙的無限の連絡、無限の延長を感じて來て、何れの方面からみるもこれ等の哲學體系に思ひ當つて來ることと思ふ。

私達の生命の無限の發展は實に私達が人生に就いて考へ、また人生に處する術を講ずる上の萬事の基礎方針となるものと思ふ。

人生の間

此の見地よりすれば、私達が一生とする此の肉體精神の存續期間は萬事を解決するのに餘りに短いやうである。表面的には多少の進歩發展は見られるとするも、實在的の向上發展は、此の五七十年間の歲月に於ては甚だ僅々たるものであらう。個人としても、宇宙としても。——此處に於て考への及ぶところ、意識的のものにしる、無意識的のものにもし

連續定則

ろ、何等かの形に於ての勢ポテンシャル、力の連續ロウ・コンチニウイティー、則は在らしめざる可らざる道理と思へる。それは常識的に、子孫への連續とするもよいであらう。或は事業への轉化連續と考へるの

もよいであらう。或は科學に於ける因果律の浪の起伏とするのもよからう。或は佛教で説くところの「生々世々業轉の説」に據るもよいであらう。兎に角、私達の一生を總ての上の一生とせず、有限中に無限在り、無限上の有限として、歩々の現實に適當なる理想の分を刻み出して行くその覺悟こそ、また人生を價値あらしむるところのものである。

夫婦は二世

此の意味で「夫婦は二世」と言つた昔の諺に微笑すべき含蓄を感じする。此の諺は一應夫婦の結縁は五七十年の歲月では解消せず、なほ、次の五七十年の繼續性を有する程その因果關係は容易ならざる情愛密度の濃厚なるものを示すと解して、無理の無いところであるが、また一方、夫婦關係の完成は、つまり理想の一心同體化は、此の現實の一生期間にては其の域に達し兼ねる性質のものであり、次生への關係繼續を期して其の到達は望まれるものであることを諷刺してゐるものとも解し得る。然し最も實踐的に此の諺の効果を擧ぐる點は、夫婦が次世への關係繼續は必ずしも問題では無いのである。問題は矢張り現世上の夫婦生活なのである。即ち現世上の夫婦關係は既に次世への延長さへ約束されてゐる深厚さを持つことを自覺することの上に、現世の夫婦關係の密接緊着が促される。無理も

聖愛の 歩手前

辛抱し、愛憐も出て來る。その功用作用である。これも亦、理想によつての現實向上方法である。事實、夫婦の關係完成、一心同體化は嚴密なる理想の標準よりすれば程度問題のものであり、其の當事間に於て、昨日到達と思へるものも、今日よりすれば不到達である場合も多い。結婚後、短時日にして其の機微を握るものもあれば、老年に及んでなほ右往左往して居るものもある。通例、夫婦生活の經驗の深まるにつれ、年齢につれ男性女性の關係より師友關係の心理を混へ、親子的、兄妹的關係の心理を混へ、友愛的關係の心理を混へ、其の方面より緊密の纖維は増數されると同時に、男女的關係心理は追々消滅され、眞にのつ引ならぬ性の純粹性と純粹性とのみが融和協同に必要な電氣として残つて行くやうである。此のとき双者間の愛は聖愛と稱するものの一步手前のものである。此の點、前に述べたD大學創設者N氏夫妻は典型的と言はるる所以である。

私はあまりに夫婦論に筆を費し過ぎた。然し、炯眼なる讀者は、此の縷述の間に於ても略々一篇の眼目とする人生の歸趨に關する骨子に就いてを觀取せられたことと思ふ。私も

それを織り交せて述べたつもりである。

従つて最早や他に多くの囁取を要しないと云ふが、なほ簡単に二三、人生上の事象に就いて一言を附したい。

事業

其の一つは事業に就いてである。事業は、社會が自分を必要として働かす一つの營みである場合がある。自から進んで社會に考へを具現化する場合がある。どちらにしても其の必需性の強いものほど意義がある。然し其の必需性の多寡は必ずしも表面に現れた効果のみにては測定し難き道理は、「天分と職業」の項目中に述べた如くであり、時間的にも短時と長時との必需性あるはまた自然の道理であつて、或は二年三年の必需性もあれば殆ど永遠性を帯びた必需性もある。それに應じて効果の現れに遅速がある。音楽の如きは——その修養や練習の時間を除いて——其の奏効時間は一曲僅か五分、十分、或は二十分、三十分で終始する。之れに較べて繪畫や文學は其のエクスピレツションを保つこと何百年或は千年以上に亘るものもある。これにより、或論者は、其のエクスピレツションの永いものほど藝術として價値多き種目とし、また或論者は其の生滅の期間短きものほど創造性

音楽、繪畫、文學

三位一體

多き價値の充實されたる貴重の藝術種目とし、おのおの其の主張を執りて動かす、今俄かにこれに裁斷を與へんとすれば、理由は簇出紛糾して益々裁斷は遅延するの結果を見るべく、果ては人々の好惡に任すより外なきに至るであらう。故に人の事業を選ぶ場合に當つては必ずしも皮相の必需性と効果に捉はれず、先づ第一に自らの天分の趣くところにより後の遺憾を避け、次に社會の必需性ととの契合を考へて公義の福祉の増進に資することを努め、第三に効果の如何を期待すべきである。此の三つのもは實は三位一體を原則とし、場合によつては公義の必需性の爲に自らの天分非分を顧るに暇なく、或は全然短時日の社會的效果を期待せず、天分の上のみ事業の推進を任せて行く等、相當廣き應用範圍を有するけれども、其の必要を求められざる限り、前述の如き思考の順序を至當とする。男子は多く事業に生き、女性は多く愛に生きるとは東西の通言である。男子は子を生まれ、外的關係の性能を多く持ち、其の理由より男子の生命を「事業」なる表現様式に於て流露せしめるは理の當然であるけれども、自らの天分を計らず、徒らに「事業」といふ名稱の快感に幻惑されて狂奔暴馳するはエネルギーの空費のみならず、他の生命の流域をも擾す恐

男と女の事業

れがある。事業の良否は質の如何に係り、必ずしも量の多寡、形の大小に係らない。また假令質は良くとも人、事業、社會の三つの關係のものが均衡し相即圓融しなければ、眞に生命の流れは現前しないのである。若し其の均衡の自信を得て勇往邁進する過程に於てならば兎に角、さも無くに誇大の妄想に向つて猪突猛進するのは、眞の生命を見出す所以ではない。世にはいろいろの事業がある。數千萬の人に臨んで地球の全面に影響を起さしむる事業もあれば、一自己の一職業を一自己の手に於て經營さるるのも事業である。私は歐洲に居た頃、かの地の人々が事業に對する國民性の相違を見て、有益な參考を得た。即ち佛蘭西人は、或事業を經營し或程度までの富を獲得すると忽ち其の事業を人に譲つて田舎に引込む風習がある。彼等は言ふのである「事業は金を得る爲である。然し、金も幸福を得る程度以上に持つときは、其の餘分の金は心勞を増し幸福を害する。そこで此の程度で事業も金儲けも放棄するのである」と。そして彼等は田舎の地に行つて自分の欲求に應ずる生活を營み、自然を楽しむ。佛蘭西にブチ・ブルジョアと稱する階級の多いのは此の故である。

佛蘭西人

獨逸人

獨逸人は權勢慾を充さんが爲に事業を張る。事業の失敗の爲に自殺する事業家は英佛には稀である。獨逸に於て多くこれを發見し、アメリカは之に次ぐ。獨逸人に取つては事業は自己の權威そのものである。事業の失敗は權威の失墜である。權勢を何物より重しとする獨逸人に取つて、事業の失敗は生きて堪ゆべきことではない。減多に自殺しない西洋人が此の爲に自殺するのである。

英吉利人

英吉利人は、事業を興すと同時に、相續税の負擔を經營費中に計上すると言はれてゐる。これは決してジョークでも逸話でもない。其の理由の一つは、英國に於て諸税率は高く、別けて相續税は重擔である。相當の富豪者流は前代の資産を承継ぐその日から、吾が一代の歲月をかけて次代の爲に相續税の用意にかかつて置いてやらねば、次代のもものは動産では拂へないのである。然しながらなほ一つの理由であつて、而かもより重大なる理由は、矢張り「英吉利人氣質」の然らしむるところと言はねばならない。即ち彼等は事業を以て家門傳統の具と見做すのである。自らの「箇」の生命は其處に没しさせ、「全」の生命として只管此の傳統の具の保壽を圖るのである。

アメリカ人

アメリカ人に取つては、金錢が萬事であると同時に金錢即事業である。經濟に矛盾せざる事業こそ事業であると共に、其の條件に抵觸する事業はまた彼等の生命への抵觸物件である。獨逸に次いでアメリカが失敗の事業家に自殺者を出す所以である。巴里在住の一米文人は彼の創作のことをいつでも業務ビジネスと呼んでゐた。彼は言つた「私の業務はやや繁ブラスター榮ライに向きつつある」と。そして其の證據を彼の原稿の文字の一字一字がアメリカの雜誌社によつて金若干づつに評價されつつある事實を公然話して聽かすのであつた。斯う話すことを彼は文人間の交際の普通の親しみの表白と心得てゐるのである。

以上、何れの諸外國の事業に對する概念も、眞の意味の事業の概念より觀れば一長一短がある。其の長を擲り短を捨てる勞を吝まざるべきである。

時代鑑識

私は或大部數を發行する雜誌社の社主の言ふのを聞いたことがある。「無論此の事業は時代に遅れてはいけないのであるが、さればとて餘り進み過ぎてもいけないのである。一二年先を見越す程度の時代鑑識眼が必要なのである」と。私はまた四五年前死んだ或科學者が、大學に彼が屬する科學の學部を創設しようとする際の抱負を聞いたことがある。

衆 賢

「此の學部が學界に業績を挙げ得るのは、今度入學する生徒達が卒業して一人前となり、其の弟子を養成し得る時に於てである」と。一は常に一二年を幅とする現實に其の事業を常嵌めることに於て彼の生命の躍動を感じ、一は二十年餘も後の時代に目標を置き、それまでの過程を現實の幅としてこれに事業を常嵌めることに生命の琢磨を感じてゐる。そして私は此の兩者に殆ど一様の満足感の溢れてゐるのを見た。これを以てしても、人と事業と現實と此の三位一體は、其の一致點を見出すのに多種類の様相があり、必ずしも二三を以て規定されない。ただ人が事業に依つて生き、事業が人に依つて生き、またこれに生かされる現實の加はる、三即一、一即三の關係は、持ちつ持たれつの關係であると言ふよりほかに其の微妙さを形容する言葉が無い。そして若し眞に此の三者が一つとなつて燃焼する場合は、これに従事する人は、刹々に無限に對する歩々を踏みつつある感じに充足するのを察するに難くない。其の時の彼等は、効果は二の次として、刹々に感謝の感じに充ちつつ在る。私の貧しき經驗に徴しても、眞に心の趣くものを書き得つつある時は、其のものの發表や反響に就いての考へは念頭に無い。

愛に生きる女性

九八

「女は愛に生きる」と言ふことに就いても英佛婦人間に相當見解の相違がある。佛蘭西婦人は文字通り愛に生きることを主張する。「女は其の女性としての力に於ていつでも男を内部より動かし得る。政治的平等権を必要とせぬ」と言ふ意見である。通例佛蘭西婦人と言へば輕佻、媚態、社交を常としてゐるやうに目されてゐるが、それは巴里の外國人相手の花柳趣味を帯びた社交界一部の女性を指してのことである。眞の佛蘭西女性は、魅力あり賢明なる家庭の主婦である。人はよく英吉利人の家庭に就いては明白に言及するが、それは人々に知られ易いからである。英吉利の家庭はよく人をそこに招いて紹介される機會も多いが、佛蘭西人の家庭は全然家族だけの家庭として、餘人の足踏みを許さない。従つて歐洲の祕密宮として舊弊呼ばはりされ、事實を窺ふものは稀だが、だがそれだけ純家庭的の意味は内抱せられてゐる。其處では主婦は絶對の責任者として生活の實質に於ても慰安の方面に於ても全力を注いでゐるのである。其の夫に對しても彼女は全部的の自信を持つてゐる。自然斯ういふ意見を保持するのである。

獨身婦人

英吉利に於ては、男女人口の不均衡や生活費の關係から獨身の婦人が多い。私達は夏季

家族の爲の家庭

餘暇期間中に歐洲を旅行してゐると、セーターを着て肩にゴルフの道具を擔つて汽車に乗つてゐる英吉利女によく出會ふ。これは大方獨身の英國職業婦人である。彼女等は運動器具を唯一の伴侶として寂しく人生を獨旅する。民族的の體質にも因るのであらうが彼女等の多くは中性的な容貌と性格になつてゐる。また職業上、生活經濟上の建前から政治的に權利を主張すべく必要を見出して來る。此處にサフラゼット以來の婦人運動の種々相が生れたのである。

女性が事業の上に生命を見出して來るといふのは、彼女等に持ち合はした特別な天稟か、それで無ければ右に述べた社會的事業に因る。之れを佛蘭西婦人と較べて其の是非を批判するのは、民族性と國情との基本條件を異にするだけに無理である。兩者はまた世界各國の婦人の傾向の兩極の代表でもある。おのおのその國の事情に依つて相當幅のある理解が必要である。

成功

今日絶對成功といふことを云々する人は少くなつた。社會の人数も殖え秩序も精密にな

九九

つて、一躍に出世し、一舉に巨財を獲得する機会が少なくなつたからでもある。また、所謂成功なるものに相當犠牲の必要な道理が實例によつて示されて居る。で、近來、成功は格別好奇心を牽くほど魅力ある目標でも無くなつて來たのである。これは一方から見れば良い傾向であるとも言へよう。多忙な今日の人間は、そんな夢幻的、外殼的のものより、生活の實質、當面の問題に就いて頭を向けて來てゐる。然し世俗的成功の考へを捨て去ると同時に實味の成功に就いての考慮も費さなくなり、刹那刹那の末梢的感の満足を以て生の充足とする人々が大多数になつたのは遺憾である。私は所謂成功といふものを人生の使用價値を評價するものの一つとして常に頭に置きたい。即ち私達は、無限の生命を幾許私達の有限的生命の上に搬出し得たか。人生を通計して其の多寡の感じ方によつて吾が人生の成功、不成功を認識したい。これこそ眞の成功の計量法である。

運命

成功に次いで考へらるるものは運命である。私達に與へられた性能そのものが一方よりみれば運命、また一方よりみれば自らの意志の責任である。佛教哲學に依れば、自然の上

「業」

に行はれる科學の因果律のやうに、私達生命生活の上にも「業」の因果律は行はれてゐると説く。これに依れば私達の運命の現象上に毫末の偶然も無いのである。次の「果」を得んとすれば「今」に於て因を植ゑよと説く。然し私達の人間性の一面は、其處に少しの不利益があつても、決して私達の人生を計數の必然性の如き明歴々たる豫想と中的約束上に行使するを好まない。多少の偶然味、多少の謎、多少の投機的な興味は残されたいと希ふ。だが、佛教哲學では覺者のみよくこれを知ると説く。即ち私達は既に生の肯定に於て出發してゐる。既に肯定を諾しての行路旅程なら、成るべく迂回なく迷曲なき目的地への到着をより多く欲する筈である。そして此の事は「業」の因果律によりてほほ直路の經濟的案内圖を示されてゐる。

私達は極力これに従へばいい。そしてまた私達は覺者ではない。故に、此の人生案内の地圖に依り出來得る限りの直路を辿りつつ、而かも變化ある人生行路の趣を、その途中に於て感ずる素質を持つてゐる。語を代へて言へば、因果必然を歩みつつ、不因^レ偶然をも味へるのである。私は此の見地より運命を悦んで迎へるものである。

要するに權勢、名譽、富、——さういふものは私達の針路に於ては直接の目標ではあり得ない。然し副産物として與へらるるものならば、強ひて辭するほど狹量で無くとも宜いと言ふ程度に扱つて適當であらう。

死

最後に死に就いて考へる。篇中、處々に分示したやうに、私は死を死と思はない。意志は相當、个性的風格を帯びたものとして次生に轉移し、再び潑刺たる行歩を開始すると考へる。これを信じない人には、或は子孫へ向つて、或は事業に於て、或は愛の姿で、或は人のメモリーの中に——ポジティブ勢力の繼續はあるべしと私は説く。而かもなほ信じない人にはかのプラグマチズム派の哲學者達が唱へる要語を傳へたく思ふ。それは斯うである。

「神の存在は全く不明である。然し、神は在るとした方がわれわれの生活に利益ならば、在るとした方がいいではないか。無理に無いとしたところで得のいくことは一つも無いから」と。

私は此の言葉の中で神を「業」の繼續と置き換へてお勧めし度く思ふ。

結 論

人生は楽しい。苦しくとも楽しい。涙を流しつつも楽しい。無限の中から理想を探り出すことは其の楽しみの一つ。理想の現實への適應性を考へることは其の楽しみ二つ。それを表現に努めるのが其の楽しみ三つ。その役務に服しつつあるそのことに於て私達が生命感を把握することが其の四つ。把握の増大と共に人格が完美に赴く意識を味ふのが五つ。われ一人のみならず四周も共に徐々文化性を開顯し行く過程を眺めるこれ其の六つ。斯くて私達は、洗面にも結髪にも、無限向上の足取りを感じて行く。無限の念願の中に一步一步の完成があり、有限の完成上に無限の念願が連はれる。これを禪の一聖者は本證妙修とも修證一如とも言つて居る。

建設社刊行書 No. 401.

昭和十六年十二月十一日印刷
昭和十六年十二月十四日發行

配給元
日本出版配給株式會社

東京市神田區淡路町二丁目九番地

定價壹圓拾錢

著者

岡本かの子
版權者 岡本太郎

發行者

坂上眞一郎
東京市牛込區揚場町八番地

印刷者

株式會社日英社
東京市神田區西神田一ノ七

發行所

東京市牛込區揚場町八番地
建設社出版部

文藝會員一〇九〇六四番
振替東京八四五四三番

920
172

忍
之
事
也
解
之
人
海
也

終

